

---

# リアルファンタジー

砂月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リアルファンタジー

### 【Nコード】

N7197H

### 【作者名】

砂月

### 【あらすじ】

俺は普通の高校生だ。いや、だつたんだ。ただ帰る途中に、変な卵を知らずに持ち帰り。気がついたら、俺の部屋で孵化してしまい……生まれてきたのが「竜」だった。おいおい、俺は一般人だぞ！と思っていたんだか。幼なじみが！異世界の姫と勇者の娘でえ？！ヤケに家に居着かない母さんが、異界獣やなんやらと戦つてて？！ヤケに若作り父さんが、医者兼任魔術士い？！聞いてないから！つか俺を巻き込むなあ！と、平穏を愛するのに、足を踏み外しちゃつて戻れない、可哀想な主人公のお話。

## 始まり

不思議な色の空だった。

その日俺は、クソ暁アキラのケンカに巻き込まれていた。

ま、いつものことだったが。

とりあえず勝利し、巻き込んだ暁をついでに殴った帰り道。

秋も更けたとはいえ、妙に凍える風が吹き抜けたのに驚き、つい空を見上げたんだよな。

夕焼けで紅く染まっていた空が、何故か妙に蒼かった。

夜を映した色じゃあない。

なんて言うか……、よく宇宙から観る地球の蒼。そんな色だった。

NASAの地球写真をPCデスクトップに設定するくらい、俺の好きな色。

しかし瞬きした次の瞬間には消え去った。

ちっ、残念。

空を見上げていた視線を戻し、両手をポケットに突っ込み、たらたらと帰路に着く。

なんかもう、寝たい気分だったのだ。

道の真ん中でも可能な気がしている、いや不可能なハズはない！

俺は出来る、俺に不可能はない……！

へろり、と立ち止まった瞬間、ズボ、グイ、とトレーナーフードを  
思いつきり引かれた。  
身体がそっくり返る勢いで。

「……ぐう、このクソ曉あ！」

やりそうな友がいる。

むしろさっきの報復かあ！

角を生やして振り返ったが。

「……？」

閑静な住宅路には、人の気配などなかった。

ここで気付かん俺もバカだったんだ。

いくら寝ぼけていたとしても……！

俺はそのまま、気のせいかな、寝そうだったしな、と再びへろへろ帰  
路に着いちまったんだ。

## 卵

「……」

俺が出来たのは、ただ沈黙することだけだった。

目の前にあるのは、俺のトレーナー。

母さんがどっかの国に行った土産だ。

我が母ながら、何をしているかよくわからんが。

父さん曰く、国際警察特殊部隊みたいなものらしい。

……、毎回思うが、絶対適当に誤魔化されてる。

家族ラブなのに、私を引き摺り廻すなあ！

と帰る度に怒っているから、本人は嫌なんだろう。

……いや、思わず現実逃避してしまう。

うん。

ベッドに脱いで投げたトレーナーがある。

結構気に入ってる。

うん、どうでもいい。

そうじゃなくて。

……なんでフードの中に、わけ分からんものが入ってる？！

つかデカイ、蒼い！

人の手のひら大の大きさだぞ！

ついでによく見たら、ビミョーに動いてないか、アレ？！

って、落ち着け、俺。落ち着け。

パニクリはじめた思考を無理矢理宥め、俺は扉の前まで退いた。

妙に首が絞まるな、と思っていた原因。  
歸りに仰け反った原因。

それがアレだろう。

あの妙に蒼くてデカイ、なんか卵に見えるアレ！

どうする？

なんか変なものが出てきたら。

いや、むしろ普通な訳ない。  
だってデカイ。

蒼いんだぞ、さっきの空みたいにい?!

無意識に目を逸らしていた俺を他所に、事態はさっさと動いていた。

具体的にいうと……、殻にヒビが入りはじめたのだ。

パッキーン!

ガラス、いやクリスタルの割れるような音が響き。

我に返った俺とソレは、じっくり視線を交わしてしまう。

「…………竜?」

マジですか…………?

夢だと思いたい

見つめる。

見つめられる。

見つめる。

見つめられる。

……、紫色の瞳だ。

瞳孔が細長い。

……、蒼いな。日本の龍とは違って、ドラゴン？みたいだ。

……、ちっこいな。

なんで尻尾を振ってた？

……。

「これは夢だな！」

そうだ、そうに違いない！

暁に叩き起こされた所から夢なんだ！

人が平和に寝ていたのに、

「助太刀しろ」

と殺気立って叩かれた所から！

むしろ今は授業中だったりするのも知らない。

起きろ！

起きろ、起きるんだ、俺！

目の前の物体から逸らせない視線を、無理矢理閉じた瞬間。

「貴生お！」

バアーン！

勢いよく開いたドアに、思いっきり後頭部をヒットされ撃沈した。  
ガン、ゴン！

我ながら、いい音がしたと思う。

「…………イテ」

「きゃー、ゴメン！ やだ、避けてよ！ 貴生でしょ！」

眩き床に転がった俺の首根っこはひっつかまれ、力一杯揺さぶられる。

「紗那！ 酔う！ 酔うから止める！」

「あ、ゴメン」

パツと離され、危うく床に再ヒットするところだった。

「ったく。伸びるだろ、このＴシャツ、気に入ってたんだから」

女のクセに、妙に力の使い方が巧く、首がキレイに絞まった。

とりあえず一番痛かった後頭部を擦りつつ、起き上がると。

最近見ない、金髪のままの心底驚愕している紗那。  
その視線が己のベッドに向かっているのに、ようやく自分の状況  
を思い出す。

「……イテエ」

てことは、夢じゃないのか。

思わず重いため息をついてしまった。

## 現実逃避

「……………」

再び俺の部屋には沈黙が落ちた。

紗那は、でっかい碧い目を見開いて硬直している。

俺は…………、とりあえず床に胡座をかく。

「……………」

紗那がまだ固まっているので、痛かった後頭部を擦ってみる。

なんでもか、擦っているとキズが治りやすい気がするからだ。

黙然と頭を擦る俺と、茫然自失している紗那を、妙に愉しげに見比べていたヤツは、唐突に鳴いた。

「きゅー?」

「うわ、鳴いた?!」

「きゅー」

尻尾を振り振り、両手足を一生懸命使いながらベッドの端に寄って

くる。

って、落ちるのか？

落ちかけたら拾うのは俺か？！

慌てて身を乗り出した瞬間。

シャラシャラ

よくわからん曲が流れはじめた。

「っ、父さま？」

硬直していた紗那が、ようやく我に返り携帯を取り出す。

蒼いアレは、音に驚いたように身動きを止めていた。

「え、うん。今きーちゃんの家」

「きーちゃん言うな」

思わず突っ込む。

いい年した男に、きーちゃん呼ばわりするな。

何度も何度も繰り返し、漸く諦めさせたつもりだったが。

「変わらないじゃん、きーちゃんも貴生<sup>キオ</sup>も」

「変わんだよ」

いつもの突っ込みを終えると、紗那は電話に戻る。

諦めないヤツだ、全く。

困惑した顔をして電話を切った紗那を待って、俺は口を開く。

……アレのことは一時棚上げだ。棚上げさせてくれ。

「お前、珍しい恰好に戻ってるな」「え？　あ、そうね。慌てたから」

金髪を一房取り、紗那はため息をついた。

「黒く染め直さなくても、髪染めてるヤツらいるだろ。もういいんじゃない？」

紗那の地毛自体が、濃い金色で目が碧い。

だが紗那の両親は、ともに黒い髪に黒い瞳。

問題にになりそうだが、

「あー、義父さんの色だなあ」

「瞳は母様ね」

と普通に笑っていた。

駆け落ちしただけあって、未だにコチラの夫婦も仲が良い。

だが紗那は、髪を黒く染めカラーコンタクトで瞳も黒くした。

小学校に入ってから、自宅にいる時にしか元に戻さない徹底ぶりだ。

常識とは？

多分本人にしかわからない屈託があったのだろつ。

両親が、全く、全然、気にしていなくとも。

あの人たちの天然具合にはかなわないからな……。

「そんな事より」

チラツと携帯を見た紗那は、視線を流す。

俺の現実逃避の原因へ。

「どうしたの、この子」

「あー……」

「キユイ〜？」

自分が話題になったのが分かったのか、再びウゴウゴ動き出す。

「なんだか神竜に見えるんだけど……」

「は？」

一部聞き取れない単語があった。  
ではない。

なんだか、何かを見たことがあるような事、言わなかったか？

「こんな小さい子は見たことないし。

むしろ今、卵を持つツガイなんていたかしら？」

ふむ、と首を傾げて、じつくりと眺める。

シートに絡まって、ワタワタしている手の平サイズのアレを。

「……、おい」

「何？」

胡座をかいている俺の横にしゃがみこんだ紗那に、仕方なしに聞く。

「お前、なんで突然着たんだ？」

アレを指差しかけ、止めた俺にちよつと呆れた視線を投げてから、紗那は肩を小さく竦める。

「相変わらず往生際悪いわね。  
貴生らしいけど。」

私が来た理由はもちろん」

言葉ではなく手の平で示され。

逃げ場がなくなった俺は、漸く聞きたくもない事を、何故か知って

そんな幼なじみに問いかける。

「アレ、何だ？」

「端的に言えば、竜、よ」

はつきりきつぱり断言され、俺はうなだれた。

なんだ、そのふぁんたじーな単語は。

あり得ない。

あり得ないだろ！

「……夢？」

「んなワケないでしょ」

しゃがみこんだ膝に頬杖を付き、まじまじと見つめられ、俺は眉を寄せた。

「んだよ？」

「貴生って、ホントに『普通』なつもりよね？」

しみじみと告げられた。

「うるせえよ。」

つか常識で考えろよ。

竜なんて存在するわけないだろ！

なんで納得、かつ受け入れてんだよ？」

「なんでって。」

……まあ、いいわ」

何かを諦めたようにため息をつき、膝を伸ばした。

「とりあえず」

呟きながらベッドに近づいた紗那は、恭しく膝をつき一礼した。

え、偉いさん？

「お初にお目にかかります。

私は、紗那・リーシャヘルド・天城と申します。

お見知り置きを、小さき御方」

「うきゅー」

モゴモゴするのを一旦止め、紗那の言葉に小さい頭と尻尾を上下に揺らした。

……、言葉分かってんのか、コイツ？

「さて」

先程の恭しい態度を投げ捨て、再び紗那は俺の横にしゃがみ込んだ。

「簡潔に状況だけ教えて」

余り見せない真剣な表情に気圧され、逃避している場合じゃあないか、と渋々俺は開き直すことにした。

「気がついたらトレーナーのフードにでかい卵が入っていて、割れたらソレが出てきた」

我ながら、とてつもなく簡潔な回答だ。  
俺なら意味不明。

「いつ帰ったの」  
「さつき」

ふーん、とうなずきながら唇に人差し指を置いた紗那は、いい具合に絡まったシーツの中でうとうとしているアレを見る。

「で」

「あ？」

首を傾げると、紗那はわざとらしく大きなため息をついた。

「かの方のこと」

「誰だよ」

もう一度ため息をつかれ、ベッドを示された。

「相当ヤバイ状況なんだけど。  
貴生、全然わかってないでしょ」

「わかってる訳、ねえだろ」

俺はもう一度まじまじとアレを眺める。

手のひらサイズのミニマムさ。  
見た目はリアルな竜のぬいぐるみだ。

恐る恐る近づいてみると、ヤツは

「はっ！」と言わんばかりにでかい目を開いた。

だが、俺に気付くと嬉しそうに尻尾を振る。

……アレ？

もしかしてなつかれてる？

「一応言っておくと、世界を創造したり、一瞬で破壊できる種族の子どもだから、そこにいらっしやるのは」

長い金髪を鬱陶しそうにしながら紗那は忠告を老婆心ながらに告げてきた。

……おおう。

## 趣味は

自慢じゃないが、現代っ子ながらロープレとかのゲームはしたことがない。

テトリスと脳トレくらいだ、経験あるのは。

それだとて、即飽きた。

プログラム思考が分かったからだ。

俺の趣味はプログラム書き。

自慢だが、この世界ではかなり名が通っている。

まあ十歳の子ともいるし、アンダーグラウンドだが。

ゲームプログラムより深い世界に魅いられてしまった。

だから。

「俺の専門外過ぎだ」

はつきりきっぱり、解決できん！

世界ってあれだろ。

プログラムのフローを弄ってプログラム世界を崩す、とかそんな話じゃないだろ？

無理！

……いや、待てよ？

某国の中枢センターに潜り込んだ時に、変なセクションファイルを見たな。

先進国のクセに、政治中枢に眉唾物な部署立ち上げて何やってんだか、とスルーしたが。  
もう一度潜ってみるか。

……ん？

「つか、なんでそんな詳しいんだよ？」日が落ちて暗くなってきたため、部屋の電気をつける。

ちなみにヤツは、何かをしたいらしく蠢いているが、何やってるかはさっぱりだ。

「……前々から不思議だったんだけど」

しゃがむ姿勢に疲れたのか、紗那は立ち上がり俺の勉強机のイスに勝手に座る。

なんだか上から目線だな、こいつ。

「何が？」

「色々。」

主に貴生が自分の人生についてどう思っているか、とか。

大体名前だつて『たかお』じゃなく『キオ』と呼ぶ時点で何か思わない？」

「……？別に普通の人生だし、名前はあの二人の趣味だろ」

首を傾げると、紗那は何とも言えない表情になった。

「……じゃあ私の名前は？　姿は？」

言われて、紗那をまじまじと見た。

昔より髪は長いか？

腰の位置より長いと邪魔にならないのだろうか。

「あ、そっぴや髪の色、濃くなつたか？

……そっぴやお前の名前、何処の言語系統なんだ？」

「……今さらな」

ふとアレの方を見て、何かを納得したように頷く。

「私と生まれた時から幼なじみやってきて、質問がソレな訳ね」

ハア、とため息つきながらばやくと、立ち上がる。

「帰るわ」

「急だな、おい。」

ついでにアレ、持って行ってくれ」

少し哀しそうなのは気になったが、言わないならもう少し待っても良いだろう。

「……、じゃあ貴生がコチラに連れてきて」

何気に触りたくない、と思っていたのに気付かれたのだろう。

渋々何故か満足気にしていたアレの首根っこを引っ掴む。

なんというか、カニの甲羅みたいな感じだ。

つか、やっぱ幻じゃあないのか……。

「きゅっ」

後ろにハートマークがついてそんな声を出された。

……やっぱなんか懷かれてないか、俺？

「ほい」

「きゅ？ きゅ、きゅ、きゅ」

「うわ！」

紗那に渡そうとしたが、唐突に暴れたした。

驚き思わず手を離すと、ぼとりと落ち、俺の足にしがみついていた。

一連を眺めていた紗那は、引き剥がそうと奮闘している俺を放置して、扉を開け放つ。

「まあ、頑張ってね」

あっさり言い放ち、扉の向こうに歩き去った。

……、俺、コイツをどうすれば良いワケ？

## 紗那Side：エピソード1（前書き）

ユニークアクセス5000越えを記念して、紗那Sideを、  
難しかった……（●A●）  
時間がかかるかる。

## 紗那Side：エピソード1

突然大気の色が変わった。

家の門を開こうとしていた私は、無意識に空を仰ぐ。

「紗那ちゃん」

母さまが庭側の窓から顔を出した。

「異界の空よ」

唐突に蒼く染まった空を指差し、駆け寄った私に平然と微笑んだ。

「『竜の渡り』ね。

この世界では珍しいわ」

この異世界出身の母は、色濃く血を継いでしまった私に色々実地で教えてくれている。

魔術然り、知識然り。

元姫君なだけに、気品のある作法とともに。

「あ」

チラりと、蒼く輝いた何かが見えた。

「玄関に廻りなさい。  
追手の気配はないわ」

「はあい」

につこり、と王者の貫禄を持つ笑みを浮かべ、母さまは部屋の中に戻った。

そう、我が家族は追手持ち。

私の父さまは、元勇者で、母さまの世界を救った後、この世界にひっついてきた。

私の母さまは、異世界の高貴なる姫で、元の世界の要だった。しかし色々あって、父さまの手を取ってこの世界に駆け落ちしたのだ。

そんな二人の娘である私は、無駄に両親の才能と資格を継いでしまっている。

そのため家族全員が、魔法や幻獣、魔物がいるファンタジーな世界から指名手配されてしまっているのだ。

「お帰りなさい、紗那ちゃん」

「ただいま、母さま」

「今日はちょうど良いから『竜』について、お勉強しましょう」

いつ母さまの世界から強制召喚されるかわからない。

しかしいつか必ず喚び出される。

そんな私のため、母さまと父さまが代わる代わる、持つ知識を与えてくれる。

毎日学校後にまた魔術や剣術、帝王学を勉強。

命懸けだからやるけど……。

一応私、花の女子高生なのに。

ため息を交えつつ、勉強用の異空間移転魔方陣に向かう。

「今日はお茶しながら、幻術で色々な種族を見ましょう？」

ケイトさんが心配して連絡してくるかも知れないもの」

頬を染めつつ言うバカップルぶりに、思わず半眼になってしまった。

「……はい」

リビングのソファーに掛け、疲れたので姿の擬装に使っていた装飾を全て外す。

「母さまの世界には、竜は何種類いたの？」

お茶を入れるためキッチンに立っていた母は、漆黒の髪を揺らがせ

た。

「数えたことはないわ。

異界渡りをする多くの幻獣がいて、何百年も私の世界で身体を休めていたもの。

私たちが知っている種族は、きちんと自己紹介してくれた方々だけ」

「ふーん」

やはり先に着替えてこよう、と席を立った瞬間。

パッキーン！

クリスタルが砕けたような音が耳に響いた。

「あら？」

「つて、貴生の家？」

明らかに現実の音ではない。

身構えたが、発生源が間近、貴生の部屋っぽい。

「キオくん、自覚ないものね？」

困っているかも知れないから、行ってあげなさい」

手を拭きながら苦笑を浮かべる母を横目に、こめかみを押さえてし

まう。

「あのバカ貴生！」

音の波が消えても、何らかのオーラが滲み出ている気配を感じ、紗那は立ち上がり、走り出す。

貴生の部屋に近づくにつれ、物凄くなる気配に慌てて部屋のドアを叩き開けてしまう。

「貴生お！」

ゴン！　と言う重い手応えを感じ、下を向くと部屋の主が伸びていた。

呆れ謝りつつ、顔をあげると。

……ばつちり、幼竜と目があつた。

……竜？　地球に？　それもこんなに小さいのに、凄い力？  
といか、見たことあるような？

茫然自失になっていると、父さま用着メロがなった。

「はい」

「紗那？ 今どこだ？」

「貴生くんの家か？」

「え、うん。今きーちゃんの家」

すかさずきた突っ込みは軽く流し、仕事中の父さまの声に耳を澄ます。

「突然監視センサーがアラートを出すから驚いた。貴生くんは？」

「えーと、ちょっとパニックってる」

「そうか。彼が原因なら仕方ない。主任の息子の暴走だ、と報告しておく。助けてやりなさい」

「はあい」

全く。貴生は羨ましいくらいに「貴生だから」で解決される。

それにしても、あの竜、神竜に色具合が似てる気がする。

現実よりファンタジー寄りの人間のクセに、貴生は現実ばかり愛す

る。

いくつかの応酬の末、前から気になっていたこと、自分の事を聞いてみた。

見事に後悔したけれど。

……そんなに興味ないんだ、私の事。  
幼なじみでもあるのに。

なんだか馬鹿馬鹿しくなって、さっさと帰ることにした。

幼竜も、自分の気配をすごく頑張って消していたし、問題ないだろう。

それにしても、父さまと母さまに、なんて報告しよう？

迷い犬ならぬ迷い竜？

パタン、と玄関の扉が閉まる音が響く。

「……、見捨てられたか、俺？」

「きゅ〜」

ひしっ、と俺の足にすがり付いたまま、小首を傾げる手のひらサイズ。

……、ちっ。

現状忘れて、ちょっと可愛いとか思っちまったじゃないか。

「どうしたもんかな」

へばりついている蒼いのを引き剥がし、目の前に持ち上げる。

…… 触れるんだよな。

幻とかだと思ってみたいんだが。

「おい？」

「きゅ〜？」

首根っこを捕まれてぶら下げられているのだが、気にしている様子はない。

短い翼をパタパタさせ、尻尾を振る。

「お前、親とかわからんのか？」

卵から生まれたばかりだとは言え、『り。』（言葉にしたいくない）  
だったらわかるのではなからうか。  
つかわかってくれ。

だが、きょとんと小首を傾げるだけなのを見て、問いの無駄を悟る。

「なんだかな……」

くう。

腹がなった。

当たり前だ。今日はクソ暁によるケンカに巻き込まれたのだ。  
それなりに運動をしたのだ。

携帯で時間を確かめると、7時過ぎだ。

「父さん、今日は遅くなるんだっけ？」

先ずは飯だ。  
母さんはまあ、しばらく帰ってきていないから、そろそろ帰宅する  
だろう。

てことは、父さんのところへ一直線だろうし。  
そういう時は、父さんが連絡してくれるしなー……。

うん。

焼き肉食いたい。

肉、あつたかな？

「きゅい？」

立ち上がった俺に、ヤツは小さい手で俺の袖を引く。

……俺は自分の欠点に、今更ながら気づく。

どうやら認めたくないことは、とことん現実逃避するらしい。

「あー、お前もくるか？」

「きゅい！」

言葉が通じているのか、嬉しそうに返答し、短い翼を広げパタパタヨロヨロと、俺の肩に飛び乗った。

「飛べんのかよ」

「きゅーきゅー」

茫然としたが、嬉しそうな鳴き声を聞き、何だか色々な気力が消えた。

ぐう！

俺の腹の抗議もデカくなってきたから、先に飯にしよう。

「ご飯は？」

「うん？　　おっ！　　ラッキー」

冷凍庫を覗くと、何かが箱詰めのまま入っている。

医者をしている父さんは、良く謝辞品を持って帰ってきてくれる。

しかし常温放置（その辺に置きっぱなし）にするのだ。

これがまた生物だったら最悪で、悪臭がするまで気付かない。

何度も片付けるうちにキレて、

「もらって冷たいものだったら、冷凍庫に帰ってすぐ入れること！」  
と言う至上命令を出したのだ。

この指令は素晴らしいと自画自賛。

アイスが入ってたこともあったのだ。

まあそれはさて置き。

「……ステーキじゃん！」

箱を開けると、凍った分厚い肉が二枚入っていた。

これはテンションが上がる！

早速フライパンとサラダ用のレタス、レモンを準備。

目の端に写る肉が、旨い料理にしてくれと訴えてくる。

自慢ではないが、父さんと母さんに料理や家事を徹底的に仕込まれたので、その辺の主婦より料理は特に上手い。

食い道楽な両親なのだ。

鼻唄を唄いながら父さん用の皿を出した時。

「きゅきゅっ、きゅきゅっ」

肩に乗っていたヤツが、俺の歌に合わせて鳴き始めた。

……軽いし動かないしで、すっかり忘れていた。

「あ？　そういえば」

コイツ、何食べるんだろう！？

「お前、何食うんだ？」

「きゅっ？」

「飯だよ、飯！」

「きゅきゅっ？」

首根っこをひっ掴み、目を合わせて聞く。

しかし、通じているのかいないのか。

小さく小首を傾げるだけだ。

……、肉食か？      なんかゲームだとそんな感じだったような気がする。

ひとまず、肉の前に小さな身体を近づけてみる。

「きゅ？」

まばたきをし、目の前の肉（自分の身体より大きい）を一瞥し、こちらへ振り返って鳴く。

じゃあ草食か？

今度はレタスの前にヤツを置く。

「きゅ〜？」

だが返るのは、肉の時同じ反応のみ。

.....  
U-246?

秋と言えば

肉食じゃない。

草食でもない。

じゃあ、雑食か？

あ、いや。雑食なら、肉か野菜かと悩まず食べるよな？

うーん……。

ぐう。

頭を抱えた俺の腹が、すさまじい音で鳴いた。

……うん、先に俺の飯だな。

レタスとレモンをさつと洗い、ヤツをちよつと押し退けまな板を置く。

レモンを切りはじめて気がつく、切った房の一つをヤツが覗き込んでいた。

手を止めて見ていると、まじまじと四方から眺めた後、おもむろにレモンに舌をつけた。

「ぎゅー！　ぎゃぎゅー」

ジタバタと手足尻尾を振り回し暴れた。

「おいおい」

急いで平たい皿に水を入れて差し出そうと振り返ると。

またそおっと、レモンに向けて舌を出しているヤツの姿が。

「オイこら！　そんな刺激物、直接舐めるな」

首根っこを引っ掴み、テーブルにぽいつと投げる。  
意外と上手に空中で翼を広げ、よたよたとテーブルに着陸したヤツ  
を見届け、再び包丁を持ち……ふと思い出す。

「確か……梨が」

冷蔵庫にあったような。

もう一度包丁を置き、冷蔵庫を開け放つ。

「お、やっぱな」

これまたご贈答品っぽい木の箱を開けると、大きな梨が五個入っていた。

「ちょっとデカイか」

手のひらサイズのアレより少し大きい。

皮を剥き、四分の一に切り芯を取り除く。

梨を剥き始めてから、ピクリとコチラを熱心に見つめ尻尾を振り続けるヤツに、一つ差し出してみる。

「きゅ？」

ヤツは小さな両手を伸ばして受け取る。

16分の1の大きさにしてみたが。

……頭と同じくらいの大きさだった。

「き、ききゅ」

小さな舌で舐め、語尾にハートマークを付けていそうな歓声をあげ、

かぶり付いた。

意外と鋭い牙が覗いたのにはびびったが。

ぽたぽたと滴を落としていたので、大きめの皿に梨とヤツをのせて置く。

ふう。

これでヤツの餌も分かったことだし。

俺も平穏な夕飯にありつけるぜ……。

## 電話

サラダの準備を終え、待望のステーキ肉をレンジ解凍しようとしてふと悩む。

「父さんの分、いるかな？」

母さんが滅多に帰ってこないため、家事は俺の役割だ。

そのための給料という名の小遣いを貰っているから不服はない。

しかし忙しい父さんの分をあらかじめ作ると、帰ってこれない日があるため無駄になってしまう。

「きゅぷ」

しゃくしゃく、と食べる音が消え、満足そうな声が聞こえた。

どうやら果物系を食べるらしいヤツ。

……どうするよ、コイツ。

飼う？ 飼えるのか？

「きゅ？」

俺の視線に気付き、小首を傾げたヤツは、皿から移動しようとする。

「待て。待て待て。ベタベタなまま動くな！」

梨の果汁まみれになっているヤツの首根っこを掴み、蛇口下に行き思いつきり水で流す。

「ぎゅぶぶー！」

よくわからない鳴き声をあげるが無視。

他の部位を掴もうにも、小さ過ぎて難しいのだから。

「きゅぶ、きゅぶ」

水を止め、適当に揺さぶって水気を切る。

「手拭きでいいか？」

「くぢー！きゅ？」

くしゃみをしてしまった。  
まずかったかな？

まあとりあえず手拭き手拭き。

ピルピルピル！

先程自分で使い、どこかに置いてしまった手拭きを探していると、携帯の着信音が響いた。

暁用の電話着信だ。

濡れた手だか仕方がない。

ヤツを手放すのも躊躇われる。

突然動き回られると捕まえるのも困難だ。

何せ小さい。手のひらサイズなので、隙間に入られると捕まえるのも一苦労だろう。

「今忙しいんだけど」

一応エプロンで軽く手を拭いてから出た。

「……お楽しみ中か？」

これでもか、と言わんばかりのドスがきいた声が電話口から流れてきた。

「きさま…覚えと、ぎゃあ！」

という悲鳴と共に。

「……お前、ついさっき、俺を巻き込んでケンカしてなかったか？」

「知らん。帰路で金出せ、と絡まれただけだ」

そう、別にひ弱には見えないのだが、何故か暁はよくカツアゲにあう。

ちょっとデカめで、ヒョロいだけなのだが。

「あそ。で、何だ？  
今俺は飯作り中なんだが」

口を開こうとしたヤツの顔面を掴みなおす。

「……何かあったか？」

「は？」

唐突な問いに、首を傾げる。

さっきの戦いで、何かあったか？

いや、最後のついでに暁を殴ったが。  
いつものコミュニケーションの範囲内だ。  
思いっきり手加減もしたし。

「何かって何だよ？」

「…心当たりがないならいい」

俺と紗那だけに見せる重厚で端的な話し方。しかし奥から聞こえる悲鳴で、何をしながら息も切らさず電話してんだか、とため息をこれ見よがしについてやる。

「くくく！」

手元でによるによる動くヤツを押さえつつ、見つけた手拭きで水気を拭い。

ふと暁なら知っているかも知れない、と思った。

「そつえば暁」

「なんだ」

「お前、ゲームやるっけ？」

「じいちゃんがやるから、付き合ってやるが……?」

いぶかしげな声を出しつつ、答える暁に光明を見た気分になる。

「なあ、じゃあ竜とか出るやつは?」

「……ドラゴンとかか?」

「そう、それ! ソイツの生態が知りたいんだよ」

拭き終わったヤツの口を掴みつつ、空になった皿を水に浸ける。

困惑に満ちた沈黙があり、暁は歩き出したようだ。

「……何のために知りたいのかによるが。  
ゲームだと、まず東洋か西洋か。善か悪か。RPGかアクションか、  
でかなり違うが」

並べられた分類の違いが半分以上解らない。

「あ? うん?」

返答で理解していないことがわかったのだろう。

「wikiで調べた方が、キオなら早いだろう。  
PC変換だと、りゅう、は二つ漢字がある。  
あとドラゴンでも調べてみる」

すらすらと言われ、慌ててメモ帳を探す。

気が疎かになった瞬間、ヤツから手を離してしまった。

「ぎゅぎゅー！」

抗議するように翼をはためかせて鳴くヤツの口を急いで閉じる。

「さ、サンキュー！　じゃ、調べてみるわ！」

質問の意図を折角聞かれ無かったのに！

慌てて喋った俺に、暁は再び沈黙した。  
今度はどうやら立ち止まったようだ。

「……………紗那は来たか？」

長い沈黙を漸く破ったかと思うと、全く脈絡のない質問をされた。

「はあ？ さっき来てすぐ帰ったけど？」

「そうか。……………わからなかったら聞け。うちに着いた。じゃあな」

何かを納得したような相づちと共に、さっさと電話を切られた。

……………何の用だったのだろう？  
つか、飯作りが進まねえ……………。

## 紗那Side：暁

パタリと貴生家の玄関を閉じて、ふと空を仰ぐ。  
もう明るい星は空で存在を主張していた。

カタンと扉に頭を預け、ため息を覚えつついてしまった。

「……ちよつと、短気、だったかな？」

一応先程の気配が何かは把握した。

しかし、キオの中で私の存在が軽いモノだと確認できてしまつて…  
…、そのまま冷静に問題対処が出来ないと思つたのだ。

心が重くなっている。

「あー、もう！」

普通の少女のような心の動きに、自嘲するしかない。

腕を振り上げ叫び、勢いを付けて扉から離れた。

これからあの竜に関して、どうするか考えなければならない。

ファンタジーな事柄に、キオは当てにならない。

ただ呆れるしかない手腕で、無理矢理解決させてしまっただけだ。  
過去にどれだけファンタジーな事件に遇つても、それはもう、見事な手法で現実的に解決していた。

……後始末が大変だが。

余りに見事なので、私も暁も組織や親を誤魔化してしまうのだ。

大事に関わりたくない私達には都合が良い、というのもある。

それに……、私も暁も。

貴生には、出来る限りの期間で良いから。

『普通』であって欲しい。

私達には、望めないから……。

「つて。なんか暗いかな」

それにしても、母さまをどうやって誤魔化そう……？

気を取り直し、家の玄関に入った。

「ただいま」

「お帰りなさい、紗那ちゃん」

『伝達』の魔導で声が届いた。

……わざわざ魔導を使わなくても。

キッチンを覗くと、鼻唄を唄いながら野菜を刻む後ろ姿。

「ケイトさんから電話があったわ。

紗那ちゃんとお話した後にくれたのよ。」

心配してくれたのね」

ハートマークを付けて話す母さまに、最早報告は不要と判断する。

「……着替えてくるね」

言い訳を考えていた時間、無駄だった訳ですか？

思わず脱力してしまう。

よろり、と部屋に戻り着替えようとした時。

ピリリ！

暁用の着信が鳴った。

「はい」

「今いいか？」

直に用件を切り出そうとする暁に、ため息をついてからベッドに腰掛けた。

「なに？」

問いかけたが、珍しく暁が言葉を躊躇った。

「？ 今家なの？」

後ろで物音がしない。

フラついている以外は、家に帰り家事を手伝うことしかしてないの

だ、暁は。

「ああ。……、貴生に会ったか？」

その一言で、暁が竜の誕生の気配に気付いたことを知る。

「さっきまでね」

残念ながら、こういう件は暁とはツーカーだ。  
複雑だが、多くの言葉はいらない。

「そうか。」

じゃあアイツが、突然竜の食い物について聞いてきたことは？」

「……はあ」

思わずため息をつく。  
そう来るか。

「気配、分かったでしょ」

「今はしないがな」

「消してたもの。」

因果関係はわからないけど、貴生、竜の卵拾って孵しちゃったから  
簡潔に伝えると、向こうも疲れたような重いため息をついた。

「よりによって、か」

「よりによって、ね」

「「はあ」「」

思わず同時にため息をついてしまう。

「……それで？　なんて答えたの？」

確か龍の血も混じっている暁に、そう言う意味を込めて聞く。

「ゲームでは、として適当に一般的な事ならな。この世界のものならイキモノの法則が違う。  
「食い物は食わん」

淡々と、もう純血は存在しない、と加えられた。

「そう。

今日の空の異変は、外界の竜渡りらしいわ。

……　なんだか嫌な予感がするけど」

呟きバタつと寝つ転がった。

「親には？」

「何も伝えてないわ。

孵化したばかりの小さな竜だったけど、自らの意思で気配を消すことが出来るみたい。

怖いけど、神レベルの存在力だし……。

明日で考えようかなって」

「……分かった。

朝、そっちに行く」

「了解。

わかる範囲、母さまから聞き出しておくわ」

「ああ。こつちでも適当に調べておく」

「じゃあ明日ね」

携帯を切り、腕をパタリと落とす。

また面倒なことになったのを、しみじみと思い知らされた感じた。

「貴生のバカあ」

眩かなければ、やってられない。

とりあえず明日、早起きしないとなあ……。。

紗那Side：暁（後書き）

暁君……。

いつの間にそんな異質な存在に？！

作者も知りませんでしたよ。

キミ、ちょっと面接に来なさい（笑）

## 名付け（前書き）

今回は、ちょっと残酷な場面があります。

残酷描写あり設定も加えました。

頭の中には、もっとリアル描写されてるんですが、私自身が気分悪くなりそうだったので、ココまで。

苦手な人はご注意ください。

## 名付け

暁の電話ついでに、父さんへ電話をすると。

やはり今日か明日、母さんが帰ってくるらしく、職場待機するようだ。

……やっぱ毎回職場で待つのは、怪我の心配なのだろうか？

息子の俺が言うのも何だが、母さんは見かけに全くよらず落ち着きがない。

よく怪我して帰ってくるのだ。

全く……、いい年なんだから落ち着きを持って行動して欲しいものだ。

さて。

回想している間に、分厚いステーキを焼き、全て自分の腹に詰め込み幸せに浸れた。

「かー、旨かったなあ」

高い肉は、分厚いの舌に蕩けた。  
合わせたガーリックとちょっと奮発した高めのバターのコラボレーション！

料理が出来て良かった、ホントに。

「さて、風呂にすつか、課題すつか……？」

「きゅー」

飯を食ってる最中からトロトロ眠りはじめたヤツの首根っこを掴み、自分の部屋の枕に置く。

すると尻尾を身体に巻き付け、身体を丸めて眠りだした。

「はぁ……」

なんでこんな事になったんだか。  
ため息を禁じ得ない。

とりあえずPCを立ち上げ、暁のアドバイス通りwiki検索をした。

……思いっきりファンタジーな内容で引いた。

だが。

「そのファンタジーなヤツが目の前にいるとな……」

存在を否定できない。  
むしろ首根っこを掴んで運んでいるため、生命の証、脈動を感じるのだ。

「うーん……」

PCを閉じ、真面目に宿題に取り掛かってみる。

……つまらん。

飽きた。

シャーペンを捨て、昨日落としてプリントアウトした、面白そうなプログラムコードを読み込んでいく。

ふと気が付くと、11時をとくに過ぎていた。  
三時間以上座りっぱなしだ。

さすがに腰が痛くなり、腕と身体を伸ばす。

ふと何故か思い出した。

一年半くらい前。

とある研究所にハッキングしたことがあった。  
政界の大物と財界の大物が、何故か無名の研究所にアクセスしている事を知ったからだ。

無名のクセに、凄いプロテクトがかかっている、と話題になりはじめたのと同時期。

……最低だった。アソコまで胸クソ悪いのは初めてだった。

人の頭。腕。足。胴体。

様々な動植物の破片。

試験管の中に浮かぶソレらと。

無理矢理移植しただろう、ヒトと動物の合体した身体の一部。

ところ狭しと並ぶ試験管の柱。

ヒトの傲慢、残忍さ。無慈悲さ。

そんな実験データと画像が、あり得ないほど累積していた。

それもデータを信じるなら……、100年以上も前から、あった。

俺は……、吐いた。

込み上げる理不尽さを、道場に行き暴れた。

疲れ果てて、また吐くまで。

……生命が存在しないことを確認して、俺は研究所のデータを全て消し、セキュリティを暴走させ研究所を吹っ飛ばした。

道場でぶっ倒れてた時、暁と紗那が迎えにきた。

二人を見た瞬間、涙が止まらなくなったのは、若気の至りだ。

まあ中二の子どもには、キツイもんだった。

まあそんな暗黒の記憶はさておき。

思ってしまったのだ。

今は平穩に眠っている子竜。

コイツもあれらの犠牲結果なのかも知れない、と。

ならば。

「面倒をみるのも、必然ってことか？」

ベッドに腰掛け、人差し指で小さな頭を撫でると、

「きゅーぷー」

寝ぼけた鳴き声が返ってきた。

なんとも間抜けな声に、思い出してしまった記憶が遠退いた。

「全く……」

笑ってしまい、肩の力が抜けた。

放りっぱなしのトレーナーをイスにかけ、ヤツを枕脇に移動させる。

電気を消し布団に潜り込み、横を向く。

揺れただろくに、無防備に眠る、月の幽かな光に蒼く浮かび上がるヤツ。

まるで宇宙で輝く、地球のように。

「ソウキ  
蒼貴。」

蒼く輝く、気高いモノって意味な。

俺の貴生、気高く貴く生きる、と言う意味の名前の一部をやるよ。

せつかく生まれたんだ、頑張んな」

もう一度小さな頭を撫で、俺は眠りに落ちた。

紫の聰明さを宿した瞳が、静かに見開かれたことを知らずに。

## 朝の一時

ジリジリジリジリ！

「きゅきゅ！？ きゅきゅきゅ！」

バシィ！

目覚ましの音と共に、鳴き声が聞こえた。  
と思った瞬間に、顔面に硬いものが降ってきた。

「……」

痛い。

しがみついている蒼貴を引き剥がす。

ヒリヒリする鼻を撫でながら、とりあえず騒音の元、目覚ましを止めた。

「ふあゝ」

思いっきり伸びをし、掴んだままの蒼貴をぱいっと放る。

「うつ……」

何時もなら、何度か目覚ましを鳴らしてから起きるのだが。

べちゃりと転がっている原因を一睨みしてから、ベッドを降りる。

「お前のせいで目が覚めただろ」

無防備な状態での衝撃で、一気に神経を目覚めさせられた。

自分が警戒を解いた状態で刺激を受けたことも若干ショックでもあり、寝直す気にならない。

しぶしぶ制服に着替え、部屋の扉に手をかけた。

「きゅ？ きゅきゅ〜！」

いつの間にか起き上がり、尻尾を振りつつ着替えを見つめていた蒼貴は、部屋を出て行くこうとする俺に

「置いてくな」と言わんばかりの鳴き声を上げ、小さな翼を広げた。

「お？」

昨日とは違い、滑らかな滑空で俺の左肩に乗った蒼貴に、ちょっと感心した。

「お前、いつの間にそんな上手く飛べるようになったんだ？」

重さを感じなかったので、肩に載せてたまま階下に向かう。

まあ両手は鞆と学ランで塞がっていたのも理由の一つだ。

「きゅ！」

妙に誇らしげな鳴き声を聞き流し、テーブルに荷物を適当に置く。朝は昨日作って置いたものを温めるだけ。

それより重大なのは、コーヒー豆を挽き朝の一杯を煎れることだ。例え遅刻してでも、これは必ず飲む。

俺の朝の儀式だ。

これまた昨日準備しておいた梨を切った実を、蒼貴に与えながらコーヒーを啜る。

「うん、今日も美味しい」

「きゅ！」

同感だ！と言わんばかりの鳴き声に、ふと視線をやる。

「綺麗に食えるようになってるな」

昨日はベタベタになりながら食っていたが、今日はどつやってか溢さず食べている。

それに妙に鳴き声の意味がわかる気が……？

「ま、いつか」

朝には考えない。

朝の俺は、基本役立たずだ。

全てを流し、黙々と食い終えた。

「あ、やべ。」

昨日課題途中のままだ」

玄関に至ってから思い出すが、もう今更だ。

ま、いつか、と玄関の扉を開けた瞬間、

「きゅ！」

と肩に蒼貴が降りたのと。

玄関前で待っていた二人と目があつたのは。

同時だった。

## 登校

おおぅ……。

「「「………」」」

言葉がみつからず、思わず沈黙してしまう。

目があった二人、紗那と暁、もこちらを凝視して黙り込んでいる。

そりゃそうか！

竜が飛んでりゃあ誰でもビビるわな？！

……つか。どうしよう……？

紗那は昨日蒼貴を見ているから良い。

いや、良いかどうかはわからないが、仕方がない。

だが、暁だ。

なぜ暁がいる！？

横たわる沈黙に、肩に降りた蒼貴までもが口を閉じている。

「「……はあ」「」

唐突に二人は顔を見合わせ、ため息をつく。

…… なんだか呆れたような重いため息だ。

「……おはよ、貴生」

「お早う、キオ」

ナチュラルにスルーされ、とりあえず挨拶に手を上げ、扉に鍵をかける。

さて、どうするか？

ものすごく見られただろう。蒼貴が飛んで肩に止まったのを。

「自転車、取ってきたら？」

普段通りの口調の紗那に、とりあえず頷き敵前逃亡をすることにした。

蒼貴をひっ掴み、早足で庭を横切っていた俺だが、はたと思い出す。

昨日は暁に首根っこ捕まれ、ケンカに巻き込まれたお陰で、歩いて帰ってきたのだ。

「つたく。学校かよ」

思わず毒づき、ため息をついた。  
仕方がない。今日は電車で向かうか……。

「きゅ？」

「きゅ？　じゃねえよ……。暁に見られたら、お前」

小首を傾げ（俺が掴んだままだから、頭しか見えないが）、目を瞬く。  
手に当たる感じから、手の中で尻尾と翼をばたつかせているのだろう。

「とりあえず動くなよ」

こんなファンタジーなイキモノ、家に置いてくのも不安だ。

ふらふら飛んでいるのを、帰ってきた父さんや母さんが見たら。

「……面白がるだけか？」

あれ？

笑って可愛がるだろう姿が即座に浮かぶ。

常識的におかしい存在であることは、綺麗にスルーされるだろう。

「……………」

蒼貴を鞆に押し込みながら、徒労感に襲われた。

「…………我が親ながら」  
首を振って、今は忘れることにする。

それよりも、暁になんて説明をしたものだろうか…………？

「貴生……。遅刻するよ」

手招きする紗那へ、顔をしかめてから門を出た。

しかし、二人して深刻な表情だったが、  
コソコソ話をしていたようだし。  
仲が良いよな、コイツらは。

「あれ？　自転車は？」

「昨日、暁のケンカに巻き込まれたから、学校に置きっぱなしだ」  
ぶすつと答えると、紗那は呆れた眼差しを投げ寄越してきた。

「つか、なんでいるんだよ？」  
お前ら、やっぱ付き合ってるんだろ」

「はあ？」

確信を持って聞いたが、返ってきたのは思いつきり怪訝そうな表情と声だった。

駅に向かって歩き出した俺たちの会話を黙って聞いていた暁は、自分の関係が疑われたことすら想定していない顔をしている。

「バツカじゃないの？　あり得ないから、それ。  
そんなことよりも、貴生」

突如真面目な声色と表情になった紗那に、俺は姿勢を正す。

自然と立ち止まった俺たちは向かい合う。

「貴生。

アナタ、あの方に名付けたの？」

あまり聞かないくらいの深刻な口調と、内容の軽さに俺は眉をひそめる。

「名付け？」

「名前をつけたか、ってことだな」

暁の援護に、紗那の言っていることは分かったが、意味がわからない。

「蒼貴か？」

暁もいるので、付けた固有名詞で答えると。

一瞬息を詰めた二人は、同時に二人して額を押さえたため息をついた。

……なんか、むかつく。

「まったく貴生ってば……」

「まあ、想定外だったな。  
もう少し躊躇うと思っていたから」

二人は訳の分からん会話を交わし、意思を通じさせている。

つか。

「おい、暁」

「なんだ」

「お前……」

……竜を見たか、とは俺は言えない！  
つかなんで突っ込まないんだ？！  
いや、突っ込まれると困るが！

呼びかけておいて言葉を濁す俺を見下ろしてから（こんなトコもむかつく！）、暁は紗那とアイコンタクトを交わした。

「キオ」

「んだよ」

「竜なんて、どうやって信じたんだ」

「……」

直球だな、おい！

「それは普通、俺のセリフだろ。  
つか、なんで慌てないんだ、暁？」

動揺の欠片さえ見えない。

普通、現実にいるイキモノと見間違っただと思うところだろ！

「僕のことはどうでもいい」

だが、さらっと流された。

クソ、こんなトーンの低い声の時、暁に何を言っても無駄だ。

「貴生、昨日はあんなに頑なだったじゃない」

一晩で認められるなんて、と呟かれ、こめかみが引きつる。

「お前、昨日はさっさと見捨てやがったクセに……」

「まあそんなことはどうでもいいわ。」

それよりも、どうして名付けをするくらい現実的処理をしたの」

言い回しが何かムカついたが、二人から視線を反らし答える。

「言いたくない」

「キオ」

「貴生」

「言え」

「言いなさい」

二人から大層ドスの聞いた声で詰め寄られたが、視線は明後日の方  
向から反らさなかった。

あんな暗黒な記憶、二人に伝えたくない。

「き！」

唐突に鞆から、鋭い鳴き声が聞こえた。

## 登校（後書き）

三人とも。

遅刻するよ！

ちなみに確信犯は暁と紗那。

貴生はスッゴい低血圧なんで、朝のうちは状態に対応するのに精一杯。

遅刻なんて、むしろ時間の経過などは忘れて去っています。

長引いて申し訳ないです。

あと少しで、誕生編（今名付けた）を終わらせ、暁編か紗那編、もしくは全然違うストーリーで父母の正体バレり編に行く予定です。頑張れ、自分！

そして読んで下さった方々、ポイントを入れて下さった方々！感謝で胸一杯です。

お気に入り登録して下さっている方々。ものすごく励みになっています。

亀より遅い歩みですが、頑張りますので宜しくお願い致します（；

|  
;  
/

## 青空

鞆の隙間から顔だけを出し、蒼貴は二人を見上げていた。

「きゅ！ きゅきゅ」

厳しい声色で鳴いた蒼貴は、口をつぐんだ後、真摯に紗那と暁を見つめた。

なにやら「黙りなさい」的なことを言った気がする。

二人も真剣な顔をして、小さな竜を凝視している。

……つか、ものすごく目撃されているよな。

なんかね、もう。

誤魔化せる範囲ではないな！

飛んでたし、鳴いたし、なんか瞳で語り合ってるみたいだし。  
これで「見間違い」と言われて信じるヤツはいないな！

つか普段通り過ぎるだろ、暁……。

あり得ないこと、何事もないように受け入れやがって！

……てか、なんかハブられてる感じがする。

今更鞆に蒼貴を叩き込むことも出来ず、俺は空を仰いだ。  
あーいい天気だなあ……？

「つか、学校！」

急いで時計を見ると、最早ホームルームにも間に合わない時間だ。

「オイコラ！ 呑気に立ち止まってる場合じゃねえだろ！」

走りはじめた俺は、のんびり歩くだけの二人を振り返って怒鳴った。  
「きゅ〜」

後でな、と言わんばかりに鳴いた蒼貴は、大人しく鞆の中に姿を隠した。

「今更走るだけ無駄だ。

第一、今日の1限は自習だ」

「私はきちんと「遅れます」って学校に連絡したもの」

平然と宣う二人を睨み付けた俺を、責める人間はいないだろう。

何だよ、その遅れても大丈夫的な、前もっての手配は？！

ムカついて、わざと離れて歩いていると、小さな二人の会話が聞こえた。

「どうする？」

「……気配は？」

「見事になし」

「僕にも感じない。」

暫くは構わんだろう」

「でも、共にあれるのかしら、この世界で。つてあら？」

貴生？ 蒼貴の食べる物、知ってるの？」

意味不明な会話を交わしていたが、唐突に話かけてきた。

パタパタと走り寄ってきてじっと、昨日とは違う黒い瞳で覗き込まれた。

「ちけーよ。

……昨日、梨食ってた。

レモンも気にしてたし、柑橘類か果物系を食うだろ。むしろ肉と野菜には興味ないみたいだしな」

「ふーん」訝しげな声で頷き、紗那は後ろの暁を見やった。

「貴生の傍にいれば良いのだろう。  
果物は嗜好品だろうな」

「きゅ」

鞆の中から、同意するような鳴き声がした。

「お前、聞いているのかよ」

鞆を揺らすと、「きゅきゅ」（当たり前だよ）「とビブラートの  
かかった鳴き声がした。

それはそうと、なんで蒼貴の鳴き声の意味が分かるのだろうか。

「成る程ねえ」

納得したように頷き、紗那は空を見上げた。

「いいの？」

「……潮時なのだろう」

深刻な表情の二人に、俺は眉をひそめた。

暁の覚悟を決めたような雰囲気も引かなかった。

「おい？」

折しも人通りが多い駅前に出てしまう。

こうなると誰に聴かれるかわからない。

不承不承俺は口を閉じることにする。

だが。

「おい、暁」

「なんだ」

ポケットから定期を取り出しながら答えた暁の視線を捕まえてから、目に力を入れた。

「助けてやるさ」

「あ？」

「何からでもな」

友達だから、とかは言わない。

いや、そんな恥ずかしいこと言えるヤツの気が知れない。

だが。

親友とも言えるヤツを見捨てられるほど、俺は大人じゃない。

守るとかじゃない。

暁も男だ。

自分で闘うだろう。

しかし、横で共闘してやるくらいなら出来る。

恥ずかしさを押し退けさせるほど、さっきの表情は悲壮だったのだ。

「貴生さあ」

後ろから呆れた声がした。

「こんな公共の場の中心で、良くそんな事言えるわね」

ふと気が付くと、周りから注目の的だった。

「うわ！」

その視線の重さに、俺は思わず逃走を図る。

「キオ」

ホームに足を向けた俺に簡単に追いつくと（足の長さは不公平だ）、  
暁はぐしゃぐしゃと頭を撫でてきた。

「頭撫でるな、ムカツク」

「ありがとな」

滅多に笑わない暁が笑みを浮かべたのを見て、俺は口を閉じた。  
紛れもない喜びを表していたからだ。

「まったく。」

そんなトコが貴生なのよね」

「お前もだろう、リーシャヘルド」

「イヤなこと、言うわね……」

「お前のことも、だぞ」

恥ずかしついでに、言いたいことを全て言ってしまうことにした。

前々から時が過ぎることに、紗那が時折暗い表情をしていることも気になっていた。

いつか軽く伝えておこう、と思っていたから丁度良い。

そんな軽い気持ちで言っと。

一瞬哭きそうな表情をし、哀しみと喜びを同時に浮かべた。

「ほんつとに貴生は……」

小さな笑みを見せ、横に寄り添ってきた。

そのまま口を閉じた紗那を見下ろすと、左側に暁が立った。

「ああ」

様々な感情の色を持った同意をした暁は、ホームから見える青空を仰ぐ。

口を開くのがもったいない気がして、二人に意味を問うのは止めた。  
いつか話してくれるだろう。

そう思い、俺も見上げた。

吸い込まれそうな青空を。

それが平穏な日々の、最後に見た青空だったと。

後から何度も思い出すことも知らずに。

## 青空（後書き）

ようやく誕生編終了です。

思っていた展開ではないので戸惑ってますが。

蒼貴はもつと活躍予定です。

次回から事件が起こるので、そこで活躍して貰います。

ポイント入れて下さった、ありがとうございました（＾Ｏ＾）

作家さんがおっしゃる執筆活力源が、皆様からの反応だということ  
を、しみじみ実感しております。

思っていたよりも長編になりそうですが、引き続き頑張りますので、  
宜しく願います〜！

## 第2章 昼休み

思いつき遅刻してこっそり学校に入った俺たちは、見咎められることもなく教室に入れた。

紗那は違うクラスだが、事前に連絡を入れていたから問題はないだろう。

問題、というか被害を被ったのは俺だ。

紗那は男どもにもてる。

だから一緒に重役出勤してしまった俺は、質問責めにあってしまったのだ。

質問の主は「暁と紗那は、やはり付き合っているのか!？」だ。

……、知るか!

つか自分で本人たちに聞けよ、と思う。

だが紗那には聞けず、暁には噂（学外の不良どもの元締めだという噂があるのだ）のため怖くて聞けないらしく。

……ウゼエ

加えて蒼貴が、教室のもの全てに興味深々らしく顔を出す。そう、動くのだ。

……こんなファンタジーな生き物、動く所を見られるのは不味いだろ。

全く持ってマズイ。

俺には言い訳、できない。

昼休みに至るまで、短い休み時間は男どもの相手、常時蒼貴の好奇心防止と大忙しだった。

もう授業なんて、聞き流すしかない。

くそー、次の小テスト、どうしてくれようか。

「キオ」

机にぐったりしていた俺に、暁がのっそりと声をかけてきた。

俺の奮闘の半分、蒼貴の動きを阻止しようとしているのを、2つ向こうの窓際の席から涼しい顔をして高みの見物をしてやがった暁。さすがに昼休みくらい、助けようと思ったのだらう。

「蒼貴、借りても良いか？」

……違った。

なんて友達甲斐のないヤツなんだ！

ある意味一目を置かれ、今日に限っては噂の中心人物の暁。それゆえ周囲で聞き耳を立てられているが、さっぱり無視している暁へ、俺はもうため息をつくしかない。

ふと、暁が廊下に向け手を挙げたのを見て、暁の視線の先を見ると。

「貴生」

小さく手を挙げた紗那が、ずかずかとクラスに入ってきた。

「暁？」

「ああ」

紗那の呼びかけに、暁は小さく頷く。

こいつら、本当に意思疎通がアイコンタクトだよな……。

「で、良いか？」

「あゝ……」

ちらりと蒼貴を見下ろす。

動き回る奴を、俺は机の中に仕舞い込んでいた。

見下ろすと、ふちに足をかけていた蒼貴が妙に真剣な瞳で二人を見上げて頷いたように見えたので、まあいいかと俺も頷く。

「ああ。昼、食いながらにするか？」

蒼貴を手に立ち上がった俺だが、紗那が妙に困った顔をした。

「あ、ごめん、貴生。今日、一人で食べて？」

食堂に向かう俺の足がぴたりと止まる。

「あ？」

「僕は今日、買ってきてある」

コンビニの袋を顔の前に挙げた暁の顔を、まじまじと見つめた。  
別に暁と二人で食堂に行くのは、約束していた訳ではないが……。  
噂、否定できんぞ、二人とも。

「ごめんね」

申し訳なさそうに謝る紗那を見下ろし、俺も困った。  
しかし、手の中で小さく動いた蒼貴の存在を思い出す。

つまり二人は、このファンタジーな生き物と、サシで対面したい、と。

「……」

まあ、気になるだろう。

俺だって二人のどちらかが、こんな生き物を突然持っていたら驚く。  
生き物なのか、しっかり観察しなければ気がすまない。

二人もそんな感じなのだろう。

俺抜きである必要性があるのかはわからないが。

「まあいいけど。ほれ」

先ほど蒼貴も了承していたので、暁に手渡す。

一見ぬいぐるみだから、別にクラスメイトに見咎められても構いはしない。

「ありがと。行こう」

「戻ってきたら返す」

紗那も持参していただろう弁当を持ち、先に立って外に向かった。暁も蒼貴を持って紗那の後ろについて行く。

二人を見送り、俺は一人食事をするのは暇なので、ノートPCを持って食堂に行こうとすると。

「お、おい！ やっぱり二人、付き合ってるんじゃないか？！」

「幼馴染だろ、お前！ 知らねえのかよ！」

「くそ！ あんな美少女が、あの悪名高い奴のモノなのかよ！？」

いきなりクラスメイトが詰め寄ってきた。

ぐわ！ ムセエ！ ウルせえ！！

っつか！

「俺がそんなこと、知るか！」

くそ！ 昼飯ぐらい、ゆっくり食いに行かせろよ……！！

### 紗那Side：エピソード3

郊外にある私たちの高校は、とてもいい場所に建っている。  
自然が多く近くには神社もあり力に満ち溢れているため、紗那と暁  
はこの高校を選んだ。

ちなみに貴生も一緒なのは、偶然だ。  
自転車を通える範囲だったから選んだらしい。  
貴生らしい。

『良い場所だな』

校舎の裏に広がる森の一角で、涼やかな風が過ぎさった。  
人気がない場所に座った二人に向け、竜、蒼貴、は深い色を宿らせ  
た両目を細め呟く。

「ここは、格別良い風が吹く場所なのです」

漆黒の髪を風に舞わせ、紗那は晴れ渡った天空を仰ぐ。

『ふむ。眷属よ。』

そなたが見つけたのか？』

翼を緩やかに震わせ、蒼貴も蒼天を見上げた。

3人で正三角形を描いて座った暁は、無表情に答える。

「ここは、な」

『そうか』

頷き、ゆったりと双眸を閉じた蒼貴は、風に身を任せ動きを止めた。

その場は、自然が奏でる音、紗那が摘まんでいる食事の音だけが、しばらくの間場を支配する。

「……と言つか、暁。  
食べないの？」

五分もしないうちにお弁当を空にした紗那は、持って来た水筒からお茶を入れ寛ぐ。

『眷属よ。』

我を気にせずとも良いぞ。我は食物を摂取する種族ではない』

瞳を閉じたまま心に言葉を響かせる竜に、暁は小さなため息をついた。

「……気分じゃない。  
それより、昼休み、終わるぞ」

ここに3人だけで集まった理由。それを暁は視線で促した。  
出来るだけ突っ込む時間を先伸ばしにしたかった紗那は、しゅしゅ正面を向き姿勢を正した。

「それでは貴き方。  
私どもの事情をお話致しましょうか。もしくは、貴き方のお話を伺いしても？」

蒼貴は丁重な口調で話しはじめた紗那に、理知的な瞳を向けた。

『私のことは主から頂いた名で呼ぶのを許そう、礼を知る者よ。  
我が眷属よ、そなたも構わぬぞ』

尻尾をゆったり振っているが手の平サイズの小さな竜だが、凄まじい威圧感がある。

「流石……」

思わず漏れた呟きに、蒼貴は小さく首を傾げた。

『そなた、竜に詳しいようだな。』

この世界の人の気配とも、微妙に違いがある。  
異界の者か？』

見つめられ、小さくため息をついた紗那は、暁に目をやった。

視線だけで促された紗那は、竜に視線を戻す。

「では。」

私どもから、この世界のことを簡単にご説明致します」

ちらつと時間を確認して、紗那はどこから説明すべきかと考え、今朝の記憶を思い出した。

「おはよう」

家の門を出ると、ちょうど向こうから暁が歩いてきていた。

紗那の挨拶に暁は手を上げ答え、そのまま貴生の門前で立ち止まった。

自宅の門を閉め、貴生の家のガレージを確認し、貴生の両親が帰っていないことを確信してから、紗那も貴生の家の門前に移動する。

横に移動した紗那を見下ろし、暁はぼそりと礼を口にした。

ふと、小さく笑った紗那は、暁を見上げる。

「私の両親もだけど、貴生の両親はね。

暁が遭うのはマズイし」

「一度見てみたいとは思いがな」

三メートルはある貴生宅の門の柱に背を預け、暁は貴生の家の庭を見渡す。

うつそうとした緑に囲まれた貴生の家は、結構な豪邸だ。

それも外敵用に最強布陣を引いている。

パワーバランスを巧妙に取り、竜脈を使って天然結界を組み、且つ独自に呪を編み込んだ邸宅なのだ。

「まあ、あの貴生の親よ。こんな家を建てられるくらいには。それに、逢うのは逢ってくれるだろうけど……」。

一応異界の姫と勇者である私の両親を、この世界に適応させられる

人たちよ。

半端ないわ。

暁、貴方、一目で人間じゃあないってバレちゃうわよ」

「キオの親なのに、か」

「だから、よ」

ひょいっと空を見上げ、紗那は大きく息を吸い込む。

「貴生の道場、行ったことあるでしょ？」

「……、ああ、一度貴生が妙に暗かったあの時のか」

「ええ。……、そういえばあの件、貴生の口を割ってなかったわね」

むっと顔を顰めた紗那に、暁はため息をつく。

「紗那の結界透過札を持たなければ、入れやしないな、あそこは」

「入れることは入れるわ、暁でも。」

「ただし、本性に強制変化させられると思うけど」

今度は暁が顔を顰める。

「……、ありがたくないな」

「ええ、まったく。」

あそこは、日本で最大、最高の術者育英機関の一部ですもの。警備は半端ないわ。

むしろ、世界でもトップを争うセキュリティを誇る道場に忍び込める札作れる、貴生のおじ様も怖いけど」

「そうか」

「あんな特殊な道場で、すつごくファンタジーな修行をしているのに、武道だと信じて気づかない貴生の鈍さも変だけど。」

一応最高峰の道場で、師範の資格を取ってしまえる貴生を生んだ人たちよ。」

桜花おば様は、世界でも5本の指に入る能力者だし。貴流おじ様は世界にほとんど存在しない筈の凄腕の魔術士。

……私も時折怖くなるわ。傍にいただけで、力が伝わって」

門越しに邸宅を見上げた紗那の頭を、暁がくしゃり、と撫でる。

「悪かった。可能な限り、会わないようにする」

「そうして。もし会ったなら、私なんかでは助けられないの。」

……「ゴメンなさい」

「気にするな。オレの問題だ」

重苦しい沈黙が落ちた時、ガチャリと玄関の扉が開く音がした。

思わず同時に振り返り……、がっくりと肩を落とすしかなかった。

ひらりと視線の先を過ぎった存在。

昨日とは違い、確実に存在を極めてしまった存在が。

「「……………」」

『名付け』を行ってしまったのは、確實だった。

紗那は思わず額を押さえたくなつたが。

己と同時に思わず出た暁の呆れたため息を聞いて、はっと我に返る。

呆然としていた貴生に、とりあえず自転車を取りにやらせ。

「どうしたものかしら……？」

もう、ため息をつくしかない状況だ。

あんなに困っていたので、貴生が直ぐに『名付け』を行つくらい、あの竜を受け入れるとは思っていなかったのだ。

「どうやって、あの現実外の生き物を受け入れたのやら」

「まったくね。もう……！」

「ものすごい力のある種族だな」

「知っている気配のどれとも違うから断言できないけど、よく似た力の気配なら、母様の知識にあつたわ。

……、神に近い力を持つ種族だけだ」

「……………」

「昨日、そんな力を放出していたし。

生まれて直ぐに、力の制御を可能にしてしまっていたわ」

貴生が戻ってくるまでには今後の方針を定めたかったが。

「キオから状況を確認してからの方が良いだろう。

竜はおしなべて、誇り高い生き物だからな。

下手な対応をすべきではない」

暁の言葉に頷き、紗那は小さく首をかしげた。

「それは、暁の言葉？ 種族の言葉？」

「……、種族だ」

嫌そうに竜の血を肯定した暁は、眉をしかめた。

確かこのやり取りの後、学校に向かう道で

『そなたらは、何者だ？』

という蒼貴からの心話を受けたのだ。

……どうやら貴生には伝えなかったようだが。

『お話は全て後程。貴生には何もおっしゃらないでください』

慌てて口止めをし、暁を仰ぐと小さく頷いたので、そのまま言葉を紡ぐ。

『この世界の理や事情は、必ず御方様に説明させていただきますので』

不審そうにしていた蒼貴だが、暁も頷くのを見て、納得したようだった。

『眷属よ。』

そなたもそう言うなら、仕方があるまい。

我の方が、訪問者であるが故な』

そうして、今の時間があるのだが。

何から話したもののか。

『ふむ。』

まず名を示してはくれぬか。

我のみが名を許すのは、いささか良い気持ちではないのだ』

眉を寄せて考え込んでいると、再び声が響いた。

慌てて見やると、蒼貴が深い意味を宿した双眸で紗那と暁をじっと見つめていた。

「失礼いたしました。

私は、紗那・リーシャヘルド・天城と申します。

世界、ガルフェクシエーンの前統治者、アルキナと、世界の崩壊を救ったケイトの娘でございます」

ガルフェクシエーンでの異種族への敬意を示す礼にて、紗那は名乗った。

「オレは、この世界に唯一現存する竜種の最後の生き残りだ。

とは言え、もはや種として純粹ではなくなっているが。

今は「暁」と名乗っている。種族名やら真名は勘弁してくれ。

そういう種族だ」

暁なりの名乗りに、蒼貴が瞬きを返す。

『双方、礼を言う。』

名乗りを強制して済まなかったな、異界の姫よ。そなたの世界は伝

え聞いておるだけだが。

そなたに良き風が吹くことを願おう。  
眷属よ。

そなた、存分力の強い眷属だと思っておったが。  
純粹ではないのか？』

「色々事情がある」

肩を竦め、それ以上を口にしない暁を見て、蒼貴は目を細めた。

『我は済まぬことを聞いたようだ』

「構わない。オレが人に擬態していることを、口外しないでいただけるなら」

『承知した。

主殿にも、聞かれない限り黙っておこう』

「ありがたく。

……、一応この世界の同種族として忠告を。

蒼貴もこの世界で姿を現すのには、気をつけられた方が良い。

この世界には、今、竜族は俺一人。そうして、それが理由で、俺は追われている」

『……』

「子竜の時、捕獲されてしまった。

あまり言いたくはない、まあ色々な事を多々受けてしまったため、俺には次元や世界を翔る力はなくなった。

この世界は他の世界に対して、とても閉鎖的だ。

その代わり、実力者は限りなく磨き上げられている。……、竜族であつても、油断しない方が良い」

あまり長文を話さない暁だが、遠い所に視線をやりながら話す内容は、紗那も聞いたことがないものだった。  
だが、追われている原因をおぼろげに悟った。

前に、逃げ出した、と聞いたから。

『……、有難き忠告、受け取ろうぞ、暁』

「ああ」

二人（竜？）のやり取りが終わるのを待って、紗那は本来の目的に話題を戻す。

「蒼貴様。

暁の事情にも絡むのですが。

……、そういえば蒼貴様？

世界の知識をお持ちということは、力はどこまで？」

ふと、蒼貴が異世界の名を知っていたことに気付き、紗那は首を傾げた。

『本来なら、力も己の役割も、もちろん知識もこの幼竜の頃にはない。

まあ、必要となったら話すが、今の状況はかなり特殊なのだ、私にとつても、な』

真摯な瞳と態度で、これ以上の話を態度で拒否された紗那は、うなずいて話を戻す。

「この世界は、貴方様を含む幻獣、魔物、魔術、魔法の類が存在しないことになっていきます、表向きは。

そうして、貴生はそれらの存在を知りません」

もはや昼休みは過ぎたが、これは外せない。

できるだけ貴生には、ゆつくりとこちらの世界を知らせたい、という意向を汲んでもらうべく言葉を尽くす。

暁にも足りない部分を補助してもらい、納得してもらったが。

『主殿は、そんな特殊な立場におってなお、普通の人間として生きておるのか……』

呆れたため息をつく蒼貴に、紗那と暁は苦笑うしかない。

「本当に不思議なんですけど」

「あいつらしいと言えば、あいつらしいが」

「「それにしても、ね（な）」」

重なった言葉に、蒼貴は尻尾を振った。

『あい判った。

しばらくは、主殿に話しかけはしまい。

ご両親にもばれないよう、姿を隠そうぞ。

我も状況を把握すべきだと思う。主殿の不利になるようなことは、

できるだけ避けなければならぬしの』

「「よろしく願いします」」

頭を下げた二人に、蒼貴は双眸をゆるやかに細めた。

『主殿は、得がたい友を持っているようで、我も嬉しいぞ』

それにしても……。

もうすぐ放課後になってしまう時間であることに、紗那は違う意味で頭が痛くなるのであった。

## 放課後

キンコーンカーンコーン

チャイムの音で、はっと我に返った。

せっかく終わらせた英訳だが、教師が休みだったため自習になったため意味がなくなってしまった。

せっかく内職して終わらせたのに、残念だ。

仕方がないので、昨日プリントアウトしたコードを書き換えようとしていたのだが。

いかんせん学校内でPC使用は、基本禁じられている。  
大目に見てくれるの昼休みくらいだ。

一応監視の教師がいたので、手書きで書き込んでいたのだが。

……後で再入力しないといけない手間が面倒だ。

課題も終わらせ、自習プリントも終わらせ、仕方がないので今日も  
らった課題も終わらせたが。

時間が余りまくったので、窓の外を見て魂を飛ばしてしまっていた  
のだ。

「くあゝ」

欠伸をしながら伸びをしていると、隣席のヤツが小さく笑った。

「本当にぼーっとしていたね。  
二人のこと、心配？」

監視役の教師がプリントを集めに来たので渡してから、俺は首を傾げる。

「は？ 誰を？」

「え？」

目に溜まった涙を拭い、ホームルームの後ですぐに帰れるよう準備しながら答えを待つ。

「天城さんたち。

戻ってきてないから」

「……あー、そういえば」

頭を掻きつつ、答えを探す。

てっきり暁のことだから授業をサボっただろう、と思っていた。

ついでに紗那は、暁に面倒な事を押し付けて（蒼貴を俺と同じクラスに返却させるとか）、今頃帰ろうとしているだろう。

昼休みから帰って来ない事に気付いた瞬間、勝手にそう思っていた、何の疑問もなく。

「ホントに冷たいわねえ」

バシィ！

と後頭部に衝撃が加わり、話題の主の片割れの声がした。

「何すんだよ」

「ちよつとくらい心配しなさいよね」

「何を？」

学内だろ。

暁も一緒にいて、何を心配しろと？」

「……友達甲斐のない」

呆れた顔をしつつ、さりげなく蒼貴を手渡された。

「はは。」

まあ。つか、暁は？」

「さあ？」

ちよつとゆったりしてから戻るって言うてたけど。  
ってあら、じゃあね」

入り口から担任が入ってきたのを見て、逆の出口から出ようとした  
が、ふと紗那は振り返った。

「……？」

蒼貴を隠しながら鞆に仕舞いつつ首を傾げた俺に一瞬眉をひそめた  
が紗那だが、ひらりと手を振り何事もなかったように扉の向こうに  
消えた。

「おい。」

僕、職員会議あるから、早く終礼してくれー」

違和感につられて俺も眉をひそめてしまったが、担任の呑気な声でしたので前を向く。

「そうだ。」

文化祭の出し物、考えておけよ、明日のLHRで決めるぞ」

「「「うおーい」」」

やる気のないクラスの皆の返答に、担任（29歳、独身。ちっさい身長が悩み）が、ヘタれた表情を見せる。

「頑張ってくれよー。職員室で僕のクラス、ランク外なんだぞ」

情けない声に、クスクス笑っていた女生徒が手を上げた。

「はい、きつちゃん！

先生たちが『出し物ランキング』に賭けてる、ってホントですか」

「あ、いや！

そんなことないぞ。

先生はだな」

「はい、きつちゃん！

きつちゃんは頼んだら女生徒の恰好してくれますか」

「お、やる気になんじゃん！」

「ナイス！」

きつちゃん、やれよー」

ワイワイと盛り上がるクラスに、俺は紗那の奇異な行動は忘れ一緒に野次を飛ばして笑っていた。

紗那と蒼貴をしまった鞆をみて、目を細めた存在に気付かずに。

丘にて

きつちゃんを思う存分からかったホームルームが終わり、てくてくと歩いていると、鞆がごそごそ動き始めた。

ーぎゅぎゅー

押し込められた鳴き声（出ても良い？ と聞かれたと思う）に、俺は苦笑した。

「やっぱ窮屈か」

「きゅ！」

周りに人気がないことを確認し鞆を開けると、底で丸まっていた蒼貴が顔を伸ばした。

「きゅきゅ？」

「ああ、暁を迎えにな」

どこへ、と聞かれた気がするので、正面の丘を指さす。

さあ、と気持ちの良い風が身体をすり抜けて行く。

「あいつら、自覚ないだろうけどな。時折迷子になったような表情するんだよ。心細そうな、でも助けを得られない、なんつつか……」

入り組んだ獣道に道を逸れ、ゆっくりと坂を登りながら、俺は言葉を探す。

「なんか独りでの絶望？ 己だけで立たなければいけない、救いがないことを覚えた、みたいな？ なんつうか、やるせない小さな子どもが泣きそうになっているような顔をすることがあってな。多分今、暁はそんな顔してるだろうからな」

黙ったまま鞆の縁に手をかけている蒼貴を肩に乗せ、透き通った空を見上げた。

「そんな時、迎えに来て欲しがってるんだ。独りじゃない、って知りたいんだろ。」

だから、俺は迎えに行つてやるんだよ、どんな時でもな」

なんか妙に、紗那も同じ種類の表情を浮かべることに、あるんだよな」と呟く主を見上げた蒼貴は、目を細め尻尾を緩やかに振る。

「きゅー」

「……、お前、今、二人がよく言う、キオだから、って科白、言っただろ！」

「きゅ」

明らかに同意され、俺は肩を落とす。

「なんだかなあ」

妙に馴染んでいるこの会話自体、常識的に考えてあり得ない、はずなのだが。

ひゅつと身体を通り過ぎた健やかな風に促され、顔をあげると。

大きな大木に凭れかかり、大空を見上げている暁を見つけた。

「つたく。やっぱか」

多分、つき合いの長い俺くらいしかわからないだろうが。  
孤独に悩まされた、泣きそうな表情を浮かべていた。

「暁」

暁の雰囲気には一切構わず、ずかずか大股で歩み寄る。

「迎えに来た。帰るぞ」

がっちり腕を掴み、さっさと歩き出す。

「キオ」

「んだよ」

歩みを止めず、顔だけ振り返る。

「……、何でも、ない」

躊躇いながらも言葉を繋げようとしていたが、最後には諦めたように目を伏せた。

「言える時、言えよ。待っててやる」

唐突に立ち止まってやり、慌てて立ち止まり顔を上げた暁の目を見て、区切りながらはつきりと答えてやる。

「……ああ」

口の端をゆるめた暁を見上げ、俺は軽く肩を竦める。

全く、世話の焼ける親友だ。

無言で腕を取られたまま歩いていた暁だが、森の出口まで戻るとさりげなく腕を取り戻した。

俺だつて人に目撃されてまで、暁と手をつないでいたい訳ではない。

要望に従い腕を放す。

「で？　今日は直に帰るのか？　バイトなら、旨いコーヒー飲ませる」

町外れの小さなカフェで単発バイトをしている暁のバリスタコーヒーは、ものすごく旨い。

あくまで本当に人がいない時にヘルプであることと、一杯当たりの単価がものすごく高価なため（一杯1300円もするのだ！　あり得ない……）、そう簡単に通えないが。

「……、わかった」

俺が迎えに行かないといけないレベルの落ち込みの後に頼むと、必ず奢ってくれるのだ。

……、迎えに行くのは、もちろんコーヒーが目的ではない！ 親友のためだぞ！

心の一瞬の葛藤を、無表情に見下ろす暁が見取ったかはわからない。

小さく唇の端をつり上げ、笑う。

「キオには、パソコンとコーヒーがあれば心の平穏を与えられるな」

「つか、取り上げたら、そいつは抹殺、いや瞬殺だ。人生を後悔させてやる」

そんな地獄、むしろ冥界？ 生きていけないぞ、俺は。

「きゅきゅきゅ」

楽しそうに笑う蒼貴に、はっと我に返る。

「蒼貴、お前は鞆に戻れよ？ 紗那と暁には、もう見られたから、仕方がない。

だけどな。他の人には目撃されないよう、気をつけろよ？ 気にしないのは二人くらいだぞ？ お前みたいなの、ゲーム中の存在なんだからな！」

肩でくつろいでいたらしい蒼貴を捕まえ、目の前に持ってきて説教をする、

「きゅきゅ」

と鳴く。

……なんか、肩をすくめ「仕方がないな」と言われた気がする。

それも、なんか哀れみの籠もった声な気が。

「お前、とっ捕まって、どっかに送られて実験動物、モルモットにされちまうかもしれないんだぞ！ もっと気を張っておけ！」

真剣に注意していると、横にいた暁は珍しく小さな笑い声をあげた。

「まあ、そんなつもりもいるが」

生暖かい笑みを浮かべられた。

……、ムカつくな！

「隠形した方がいいかもな。キオも心配しているし」  
「きゅう」

わかったと言わんばかりに首を縦に振った蒼貴を見て、俺は首を傾げる。

妙に仲良くなったもんだ。

つか、なぜにそんなに速攻馴染めるんだろうか。

今更だが、竜だろ？

すっごくファンタジー。

すっごくあり得ないだろ、存在自体！？

……、ゲームか？ ゲームをするってのは、ファンタジーに耐性がつくものなのか？！

自問自答している俺を見て、暁は何かを思い当たったような表情

をしてから、「実験動物で理解したのか……」と呟きながら、見えないように小さく肩を竦めていた。

「キオ。俺はカバンを取ってくるが」

暁の声に我に返った俺は、掴んだままの蒼貴を鞆にしまい慌てて歩みを再開する。

「珍しいな？ 鞆に大切な物でも入れたのか？」

ム力つくことに、こいつは教科書を丸覚えしているようなのだ。その上全ての問題をすでに解き終わらせたノートを持っていやがる。それも全教科分。俺と話している目の前で、2日もかけず終わらせやがった。

嫌みな奴だ。

それはともかく。暁の鞆はいつも軽い。

教科書とノートを持ち帰る必要がないからだ。

むしろ時々重そうに見える時、何が入っているのか突っ込めない。そういう時は大概、授業を途中から抜け出す。

……、何やってんだか。

「携帯、入れてる」

「ああ！ なーる」

携帯を持ち歩くのを面倒がるのだ、暁は。

だが紗那が、俺と連絡を取るには必要だ！ と力説していた。

……、そこになぜ、俺を説得材料にする？

そしてなぜ、納得したように持つことにするんだ、暁！  
という一場面があつたのは、閑話休題だ。

普段通り無表情になつた暁と校舎に向かっていると。

ピリリリリ！

「……うわぁ……」

思わず引いた声をあげ、音の元を見下ろす。

携帯の着信だ。わかっている。わかっているが、この音の相手は。

「まじ、今日帰ってきたのか……」

「キオの母さんか？」

「……、ああ、ああ……」

ため息をついた俺を見下ろし、暁は俺や紗那しか気づかないだろ  
うほどの微かに表情を動かした。

「……、イヤなのか？」

気遣う表情に、俺は手をひらひら振る。

「いや、別に。母さんがイヤなんじゃなくて。

今回、かなり長期出張だったから、すごいテンションが上がっ  
てるだろっから。付き合いたくねえんだよね……」

そう、長期になれば長期になるほど、帰宅直後の母親のテンシヨ

ンはヤバい。

まずは、

- 1。抱きつかれ……
- 2。すりつかれ……
- 3。家族愛を叫ばれ……
- 4。息子愛を叫ばれ……
- 5。父さんへの愛を叫ばれ……
- 6。父さんのノロケを延々と聞かされる……↑これが一番長く辛い。

……、鬱だ。

帰れない期間に比例して、最後のノロケの時間が延びる。  
愛し合うのは構わないが。

そんなの本人に直に言えよ、と思う。  
父さんはそんな母さんを見て、にこやかに微笑んでいるだけだ。  
くそう、絶対安全圏で巻き込まれるつもりはないんだろうな……。

放っておいても着信し続ける。

……、マナーモードのままにしておけば良かった。

「はい」

「まだ帰れないの？」

渋々出ると、滑らかな声が響いてきた。

「今帰るところ」

「そう。早く「ただいま」って言いたいから、至急に帰ってきてちようだい」

「……、母さん、今どこ？」

冷静な口調が、嵐の予感だ。

少しビビりながら聞く。

「うちに決まってるでしょ。母さんが帰る場所は」

「うん。まあ、そうだけど。」

お帰り」

「……、もう！ 早く帰ってきて、顔を見せてちょうだい！ って、貴流さん？」

「ごそがさ、という音とともに、今度は父さんの声が流れてきた。」

「貴生。お前が帰り次第、天城さんたちと夕食を一緒に行く予定だ。早く帰ってきなさい」

暗に、そんなに再会の儀式は長くない、と言いたいのだろう。しかし。

「紗那もか？ あいつのクラス、劇をするらしいから、放課後帰るの遅いけど」

「もう帰路についているはずだ。先ほどケイトから連絡があったからな」

「……、了解」

渋々頷き通話を切る。

紗那の父親、慧斗は自分の父親、貴流の部下だ。

絶対、公私混合で電話させやがったな、くそ！

黙って聞いていた暁は、ため息をついた俺の肩を叩き、歩きだした。

「また今度、奢るさ」

ひらり、と手を振り、校舎に向かった暁の背中を見送る。

取りあえず暁の元気が出たのは、よいことだが。

「俺が黄昏たいぞ……」

帰ってからの狂乱を想像し、思わず空を見上げてしまう俺だった。

お帰り…

「……？　どうしたの、貴生？　妙に疲れた顔をしてるけど」

リビングのソファーにぐったりしていると、紗那が声をかけてきた。

「あら、いらっしやい」

「こんにちは、桜花おば様。

お久しぶりです。

お邪魔致します」

丁寧な仕草で頭を下げた紗那に、母さんは上機嫌に頷く。

「ありがとう。

座っていて？　今お茶を淹れるわ」

落ち着いた笑みを浮かべる母さんに、紗那もにこりと微笑み頷いた。

「父と母もすぐに参ります。

少しお待ちせしたので、私が先触れにお伺い致しました」

ソファーに近寄り、ちらつと見下ろされたが、倒れた姿勢を正す気力はなかった。

もうしばらく、そっと放っておいてくれ。

一瞬顔を上げ、目で訴える。

紗那は呆れた表情を見せたが、気にはしない。

精神的に疲れ果てているのだ。

\*\*\*

暁と別れた後、チャリで帰宅したのだが。

「……ただいまー」

ガチャリと玄関を開けた瞬間。

気配なく伸びてきた腕に拘束され、思いっきり抱き込まれた。

「お帰り〜！

遅いわよ？ あんた、もっと早く帰って来れるでしょうに！

もう！ ただいま、貴生くん！」

物凄い力で抱き込まれ、思わず悲鳴を上げる。

「いだ！ 痛いいたい！ 痛い背骨が軋むつか本気の力で抱きつくな死ぬー！」

叫び散らす、母さんは今まで以上の力で締め上げてきた。

「何を言ってるの？！ 母さんと貴流さんの息子なんだから、これくらいで死なないわよ！」

半年振りの再会に言うのがそんなことなの、貴生くん！」

この母が何を専門にして仕事をしているのか、未だにわからない。

だが、これだけはわかる。

この人は、絶対荒事のプロだ！

道場に通う俺を、難なく力だけで押さえられる技。

反撃を難しくする急所を押さえつけられ。

身動きが取れない！

「もうう、貴生クン！ 私の可愛い息子！ お母さんにもっと存在を確かめさせてちょうだい！」

……、嗚呼。

始まってしまった。

なし崩しに始まった儀式に、俺は観念に目を伏せた。

逃げられないのは、経験から実証されている。

それに。

今回は確かに長かった。

大体一ヶ月に一度は帰ってきていたのだ、今までは。

母さんみたいな人には、辛かったのだろう。

とりあえず。

「お帰り、母さん」

呟くと。

「……！ だから貴生くん大好きよ！」

歡喜の声を上げられた。

……失敗したかも。

儀式が終わったタイミングを見計らったように、玄関の扉を開き父さんが帰って来た。

「ただいま」

「お帰りなさい」

先ほどの狂乱の欠片も見せず、母さんはいっこりと微笑む。

くったりした俺を抱き締めたまま。

「お帰り貴生。

着替えてきなさい。

天城家の人たちが来たら出掛けるよ」

何があつたか気付いただろうに、何事もなかったように言うのは止めて下さい、父さん。マジで。

\*\*\*

ようやく着替えて、ソファで休んでいたのだ。

「そんなに気を使わなくても良いのよ？」

「いえ、当たり前のことです」

母さんと紗那の会話を聞きながら、本格的に意識が遠退き始めた。

……攻撃力強すぎだよ、母さん……。

さて、天城家の夫婦が合流し、向かったのは個室のあるレストラン。看板が出ていない、本物の隠れ家レストランだ。

……毎回思うが、どうやってこんな店を見つけるんだろうか、父さんと母さん？

母さんは特に、最近日本にほとんどいないみたいなのだが。

「ねえ」

ツンツンと肩を突っつかれ振り返ると、背後に紗那がこっそりと立っていた。

まあ気配で分かっていたので驚かないが。

「どうした？」

親たちの前でコソコソしようとするのは珍しい。  
腕をぐいっと引っ張られたが、俺は逆らわず身を屈めた。

「蒼貴様、どうしたの？」

背伸びされ、耳元で囁かれた。

うむ、こそばい。

「連れて来れないだろ、あんなファンタジーなイキモノ。  
あの人たちに気付かれないよう、事を運べる自信がないしな」

肩を竦め、持っていた皿をテーブルに置いた。

普通にコースっぱかったのに、無理矢理母さんがバイキング形式に  
してしまった。

大皿に料理が盛られ、成長期な俺的にはOKだが……。

母さんがマナーもない無理を言っつて、ウェーターさん、ごめんなさい。  
い。

自分の欲しい物だけを取り、端に避けられたテーブルに向かう途中、  
紗那に声をかけられたのだ。  
親たちは、なにやら仕事の話っぽいもので話込んでいる。

それにしても、真剣な割りに食事を優雅にこなすよな、あの人たちは。  
は。

「……バレてはないのよね？」

珍しく二度も聞くので、俺は首を傾げた。

「あんな非現実的なイキモノ、見つけたら普通、問い質してくるだ  
ろ？」

椅子を引いてやると、紗那は小さくため息をつき、手に持った皿を  
置いて俺の引いた椅子に座った。

「……ホントに問い質してくると思う？  
貴生のご両親だよ？」

「あー……」

普通なら聞いてくるだろう。

だがあの両親だ。

息子の俺が言うのも何だが、あの人たちの反応はいつも想像が付かない。

常識の斜め上の反応をされるのが常だ。

「うーん。

まあ見つかったても、可愛がるんだろうな、とは思っ」

取り分けたのを口に運ぶ。

……美味い！

がつがつ食べ始めた俺に、紗那は眉を下げた。

「真面目に考えてる？」

「考えて答え、出るものか？」

それよりも、食べば？」

母さんが見つける場所は毎度トンデモだけど、飯はめっちゃ美味い。今回もスゲー！」

早くも空になりつつある俺の皿を見つめ、紗那も料理を口に始める。

「そりゃあ、かなり美味しいけど。  
でも、こんなに魔元素っぽい、強制魔力回復料理を調味料だと思う  
る貴生に感服。」

魔力酔いもしてないし……」

「？ 何をぶつぶつ言ってるんだ？」

皿を空にしてしまったため、補充しようとしつつ立ち上がりながら  
首を傾げた。

「なんかいるか？」

「お茶が……、いいわ。私も行く。」

両手塞がるでしょ？

貴生こそ、何を飲みたい？」

「そうだな……」

飲みあわせを考えつつ、大皿の乗っているテーブルに視線をやると。

いつの間にか黙り込んで、じっとこちらを眺めていた四人と目が合  
った。

妙に意味ありげな沈黙とともに。

「……んだよ？」

「『『『なんでも？』『』『』」

にやにやしている親たちに、俺は顔を引きつらせる。

明らかに下世話な事を考えている眼だ！

母さんなんて、目が三日月になってやがる！

このあと、散々意味不明な事でからかわれた。

飯は美味かったが……、疲れた。

妙に紗那に余裕がないのが気にはなったが。

因みに父さんと母さんに、蒼貴のこと、この時点でバレていたと。  
後で知った事だった。

## 星空の下で 1

タンタンタン！

貴生と紗那が食事を終えようとしていた頃。

ビルの壁を蹴り、空に飛び上がる存在がいた。

屋上に到達した黒い影は、周りを見回す。

だが目的のものが見つからないのだろう。

小さくため息をつき、新月の夜空を見上げた。

冷たくなってきた風が、黒づくめの存在の横を走り抜ける。

小さく首を振った影は、15階の高さより躊躇いもなく身を躍らせ、数瞬後、離れたビルの屋上に姿を現す。

星たちの微かな光の中、遠ざかって行く影。

見送りながら、屋上の暗がりの壁に背を預けていた暁は、組んでいた腕を下ろす。

暁の持つ竜瞳には、暗がりなど意味を持たない。

難なく影の去る姿を見ることができただが。

「……ハア」

とりあえずこの世界の人間の気配だったので、紗那の追手ではないだろう。

今のところ、狙われているのは異世界の住人だけだ、と言っていたが。

跳躍するだけで、10階程度の高さまで飛び上がれる存在を、普通とは言えない。

イコール。

自分の追手の可能性あり、だ。

ここ二年近く追っ手が来ない事を、訝しげに思っていたのだ。

偶然見つけた暁を実験動物ごとく、キメラに造り変えた組織は強大だった。

偶然の爆発事故で、組織があつたらしき建物が吹き飛んだ時期ぐらいから、組織の気配を感じないな、とは思っていたのだが。

「……仕方がない、追うか」

ダルそうに呟き、身体を起こす。

次の瞬間、その姿は消え去っていた。

後には、変わらず星空が煌めくだけだった。

\*\*\*

ピルピルピル！

レストランの外で、支払いをしている親たちを待っていた俺は、響いた呼び出し音に首を傾げた。

「こんな時間に？ 珍しいわね」

隣で空を見上げていた紗那は、取り出した俺の携帯表示をもって見て一緒に首を傾げる。

「だよな」

祖父母と暮らしている暁だ。

暁が老人の夜の早さに合わせている事を知ってるため、深夜近くに電話をしてくる事などほとんどない。

「どうした？」

「悪いな」

ピツと出ると、背後からのざわめきと共に暁の声がした。

「外にいるのか？ 珍しい」

俺の言葉に、紗那も瞬きをすることで驚きを示す。

「まあな。  
キオも外か」

別段切迫した口調ではないので、俺も普通に答える。

「ああ。  
ちよつと出るのが遅くなったから、今ようやく飯食い終わったトコだ。紗那もいるぞ」

ふと紗那に視線をやると、険しい表情で空を見上げていた。

「紗那？」

声をかけた瞬間。

タン！

と微かな足音が聞こえた気がした。

音がした方を振り仰ぐと、黒い人影が屋根伝えに跳び去って行く所

だった。

「……？」

まあ普通に考えて、人影な訳がないか。

「んで、どうかしたのか？」

スルーして意識を携帯に戻す。

「……、紗那がいるんなら、ちょっと話させてくれ」

「……、まあいいけど」

何故俺に電話かけておいて紗那？　と思いつつ会話を始めた時、視線を戻してきた紗那に携帯を渡す。

手渡された携帯と俺を見比べた紗那は、二三回瞬きして顔を上げた。

「暁」

指で示す。

「……？」

どうしたの？」

不思議そうにしていたが、携帯を耳元に当てた瞬間、先ほどの険しい表情に戻った。

「私たちの高校ね」

一言告げた後は短い単語と、相槌を打つばかり。

妙に疎外感だ。

「はい、暁がありがとつて」

チラリとまだ両親が出て来ないレストランを見てから、俺に携帯を返す紗那。

眉をひそめている紗那にデコピンをくらわせてから、携帯を耳元にあてた。

「お前らなあ。

俺の携帯使って内緒話するなよ」

携帯の向こう側とこちら側に抗議する。

だが二人とも、同時に苦笑するだけだった。

「助かった。  
また学校でな」

プツ、と切れた携帯に訝しげな視線を落とす。

一体何の用だったんだ、アイツ？

「暁、貴生のいる場所、知りたかったんだって。  
でも住所的なこと、私の方が把握しているでしょ？」

いつの間にか紗那が手にしていた、レストランの名刺。

どこにあっただろう？

「鉢合わせはマズイって思ったのよ、暁」

小さな呟きに、俺は首を傾げる。

「……？  
俺に？」

「まさか！ 違うわよ」

だがそれ以上は口にせず、ふと紗那は夜空の彼方を睨み付けた。

「あー、いい買い物だったわあ」

その時どやどやと親たちが漸く出てきた。

しかし。

「あー、……」

「……………」

各自の親が持っている物を見て、俺たちは目を見合わす。

「……帰ってまた、酒盛り開始ね」

呆れ口調の紗那に、俺も力なく同意する。

少なくとも三時間前には食い終わっていたが、親たちが呑み始め……。

今に至るまで絶え間なく奴らは飲んでいた。

まあそんな展開になるかも、と俺はPCを持って来ていたし、紗那はよく解らん分厚い辞典を持って来ていた。

どんちゃん騒ぎの横で好きな事をしていたのだが。

「あー、客間用意してあるから」

「ありがとう」

夜明けコースは久しぶりだ。

紗那一人を家にやるのを、うちと紗那の親たちは嫌がる。

「何かに襲われたらどうするの！」  
だと。

だが両家とも飲み会をしょっちゅう開催し、紗那が一人になりそうなことが多いので、その時用の紗那客間が存在する。

ちなみに昨日、イヤな予感がしたので準備しておいたのだ。

片手に二三本つつワインを抱える大人たちを見て、俺と紗那はもう一度ため息をついた。

はあ、早くタクシー来ないかな……？

## 星空の下で 1（後書き）

今年最後のアップです。

ファンタジー部分が抜けている気がしていたので、一気に物語を進めてみました。

分かりにくい箇所があればご指摘下さい。

読んで下さった皆様、今年ありがとうございました。  
来年もご贔屓戴けると幸いです。

またポイントを入れて下さった皆様、私の神様！  
よいお年をお迎え下さい！

それでは続きは来年に、お目見えしたいと思います。  
宜しくお願い致します。

砂月拝

## 星空の下で 2

カチリ、と携帯を折り畳み、安堵のため息をつく。

「気付いて良かった……」

ビルの影の中に立っていた暁は、頭を後ろの壁に預けた。

黒い人影が見えるギリギリの距離で追っていた暁だが、ふと、進路方向に知った気配があることに気付いた。

家とは全然違う住宅街だったので、そのまま追うつもりだったが。

紗那の哀しそうな表情が目裏に浮かび、思いとどまった。

そう、気配はキオのもの。

他に異質な気配はしないが、紗那は勿論、聞く所のキオの両親だとて、気配を日常的に消しているだろう。

暁や、例え蒼貴にだって簡単には読めない程のレベルだと考えられる。

キオの家からの距離を考え、キオ一人、この時間にふらふらと住宅街は歩かないと判断する。

基本的に、キオは暇さえあれば家に引きこもって、ハッキングやブログラミングに精を出している。

今日の帰りのやり取りから、今は両親もいるだろう。

紗那は、所謂「同士」だ。

異質な自分たち、その孤独を無意識に救ってくれるキオに依存してしまっている、という。

自分自身のことは仕方が無いが、相手なら救ってやりたいと思う、貴重な友。

僕の特殊性がキオの両親にバレるのを、紗那はとても恐れている。

「一番助けられない相手」だから、だそうだ。

「……確認するか」

紗那の願いは、聞ける時だけは聞いてやることにしている。

紗那も僕に対して、そう考えているのを知っている。

追われる者同士として、またキオに依存している者同士として。

紗那とは互いに信頼するパートナーだから。

躊躇ったが、一旦ビルの影に降り追跡を止め、携帯を取り出す。

「悪いな」

少し鳴らした後で出たキオの声に、切り離していた「普通の日常」を感じる。

思わず心が安らぎそうになり、自戒する。

「紗那か。」

今通り過ぎた奴はいるか？」

前置きなしに、電話口の紗那に聞く。

キオが傍にいるのだ。

簡潔に、分かりにくいように、知っている者だけに通じる言葉で、聞く。

「私達の高校ね」

直ぐに質問の意図を読んで、紗那が答えてくれる。

「やはり、か」

向かう方角から考えて、この時間に確実に人がいない場所。広大な広さを持つ場所は、自分達の高校ぐらいだ。

暁が立ち止まってから方向転換していないようだ。

「そちらに向かうのはマズイか？」

「ええ」

「……両親がいるか？」

「両方のが」

「通り過ぎた奴、追えるか？」

「もうしてるわ」

「……お前のじゃないだろうよ」

簡潔に答えていた紗那は、小さくため息をついたようだ。

「後で電話くれ」

「分かったわ」

了承を得たので、暁は帰ることにする。

「キオに礼を言っておいてくれ」

「ふふ」

笑った後、一瞬の沈黙を挟んで、キオの声が流れてきた。

……、まったく。

紗那も粹な事をする。

ふっと笑い通話を切った暁は、ネオンの奥で輝く星を見上げた。

探索で探っていた術を己の身体に戻す。

戻した刹那、誰かの探索の術が、学校とこちらへ伸びて来ていたのに気づき、慌てて飛び退く。

蜘蛛の糸より細く気配のないソレに、気付いた自分を自画自賛する。

普通に気付かない。

意識を他の何事にも囚われていなければ、例えば歩く、ということをしているだけでも気付けない。

そんな繊細かつ高度な術に、暁はぞっとした。

もし普通の生活をしていたら……！

ゆっくりと伸びてくる術を見据え、暁もゆっくりとその場を徒歩で抜け出す。

可能な限り気配を押さえながら。

充分離れてからタクシーを捕まえ乗り込み、漸く冷や汗を拭う。

緊張で乾いた唇を舐めて、ぐったりと深く座る。

「確かに、僕より化け物級だ」

あの術は、多分キオの親だろう。

「……近寄らなくて、良かった、な」

暁は大きくため息をつき、自宅で紗那の連絡があるまで、じっと息を殺す事にした。

結局紗那が連絡をくれたのは、夜明け頃。

「……、まだ貴生の両親とうちの両親、飲み会中よ」

「……。今、朝の4時だが」

ぐったりした紗那の声に、遅いとは言えなかった。

彼らの親の実力だろう術に触れた暁は、電話さえ用心する紗那の態度に賛成だからだ。

「まだ貴生は、引きずり込まれたままよ」

「……、そうか。」

蒼貴は？」

携帯を持ち直し窓辺に寄り掛かった暁は、明るくなり始める夜明けを眺めた。

「外に出るには、結界に触れないといけないから。  
どうしようか悩んでらっしゃったわ。変な気配がしたから、確認し

たかったと」

「ふ、ん」

「あら？ ちょっと待って」

「ごっそ、という音がした後、スピーカーから『言葉』が聞こえてきた。」

『深刻な話し合い中済まぬな。  
主殿のことだ。』

「どうやら主殿は、我が言葉は聞こえずとも、意図を汲み取れるようだ。」

「加えてどうやら、力を封印されているようだ。しかし、その封印も強すぎる主殿の力を受けて綻びかけている。」

「主殿の漏れている力を追っている者の可能性もあるのではないか？  
言い忘れておったが、我は生まれ変わる前の記憶を保っておってな。  
主殿の力の煌きは、そうない故に、追われやすいぞ」

「……、了解」

「否定できないわね……」

「微かな紗那の声を拾った携帯を見下ろし、暁は空を仰ぐ。」

「そういえば、紗那」

「何？」

「ふと思いついたのだ。」

「どうやらキオは、蒼貴を『実験』で生まれたモノだと思っているようだ」

「はぁ？」

「まあSFで良くあるアレだ。  
だが、どうして現実的に可能だと知ったのかは、疑問だが」

「……キオってば」

共通の和む話題で氣力を奮い立たせ、元の話題に戻る。

「今日、早めに登校して様子を見てくる」

「それは、私が行った方が良いんじゃない？　今回は、私のじゃないでしょ」

「まあな。」

だが、その家、抜け出せるのか？」

キオからも聞く地獄具合から、紗那だけは抜け出せないだろう。

大人のくせに、ものすごく始末が悪い。いや悪い所ではないエピソードをキオと紗那に聞かされた事があるのだ。

「……、ごめん、やっぱり無理」

即座に提案を撤回した紗那に、苦笑をもらす。

「そちらの誰かが、影に「探索」を伸ばしていたからな。」

無茶はしないさ」

「……仕方が無いわね。気をつけて」

「ああ」

『自愛せよ』

大人しく聞いていたあろう蒼貴の言葉を最後に、通話が切れた。

明け始める空に、暁は目を細める。

「……、同族、か」

初めて出会った同族だ。

気配に馴染みはない。元々竜族は、スタンドアローンな種族だ。だが。

「いつか、話をするのも、悪くないかも、な」

竜らしくもなと思う自分は、キオに毒されているな、と心地よく思えた。

「さて、と」

行くか、と立ち上がった暁は。  
一瞬で部屋から姿を消した。

後には、開いた窓から涼しい風が舞い込む無人の部屋が残るだけだった。

## 星空の下で 2（後書き）

どうも暁ターンな2話目です。

今年中には、とりあえずもう2章くらいは終わらせる事を目標にします！

ポイントを入れて下さる方々、ホントに拝みました。参拝で。  
ありがとうございます！

今後も宜しくお願い致します。  
修正、追加いたしました。

砂月拝

## 星空の下で 彼らの朝

唐突だが。

我が家には、超万能セキュリティが入っているらしい。

S.O.COMが何かか？

そんな仕掛け、家の中でみたことがないが。

母さん曰く、

「侵入者、不審者あれば即座にアラーム警報が鳴るようになって、30秒以内には必要か否か判断し駆けつけられるシステム」を組んでいる、とのこと。

つか、物理的に無理だろ、30秒以内に駆けつけるって。

つか我が家にそんな壮大なシステム、いらんだろうに。

それよりも、紗那の両親が留守になるからって、俺ん家に預けるのを先に止めれ、と物申したい。

一応年頃の男女だぞ？

一年に二、三回の頻度で預けていくな。

家は俺一人であることの方が多いんだ。

俺が手を出すことはあり得んが、世間体が悪い。

つか、大人ならその辺配慮しろ。

とまあ、朝の食事を準備している時、紗那に訴えてみた訳だ。紗那は苦笑しつつ、小声（紗那と俺の両親たちは、俺たちと入れ替わりに寝に行ったばかりだから）で答えた。

「まあ、30秒というのは微妙なラインね」

「だろ？　つかそんな嚴重にこのうちを警備する必要性がわからん」

梨の皮を剥きつつ、改めて台所を見渡す。

……特に監視モニターもない。

「ちよつと貴生と30秒の意味が違つかも。

来ようと思つたら、30秒も要らないでしょ。

逆に判断材料が幾つも与えられるよう、多くの結か……、じゃなくて、セキュリティシステムを常時展開してあるわよ？」

使い方、私、教えてもらったわ、と言う紗那に、顔をしかめる。

……まったく。

絶対「紗那ちゃんが危険に晒されてた時に！  
貴生君は自分で何とか出来る。  
むしろなんとかしなさい」とか言ってるんだろ。

まあいいけど。

「貴生、私、先に行くわね」

「あ？　今日はチャリあるぞ。  
後ろに乗れば？」

道理でリビングにカバンがある訳だ。

紗那製卵焼きを食べながら、俺は首を傾げた。

「うーん、ほら。」

昨日突然の帰宅命令出たじゃない？  
クラスの出し物、どうなったかなって？」

「ふーん？」

紗那のクラスは劇だったと思ったが。

「貴生はゆっくりコーヒーを飲んでから登校して？  
親たちには、人数分のお味噌汁作ったから」

ああ、スープがあるのに味噌汁作ってたのは、あのダメ親たち用にか。

「まあ、頑張れ。」

てか、紗那、お前、何役するんだ？」

紗那の味噌汁を摘まもつと立ち上がり、ふと振り返る。

食べ終わった食器を重ねていた紗那も首を傾げた。

「あら？」

私、言わなかった？

裏方美術よ」

重ねた食器を持ってきたのを奪い、シンクに置いた俺はため息をついた。

奪われた食器の代わりに、俺に味噌汁をよそってくれている紗那は苦笑した。

「はい。」

もしかして、貴生の方に行っちゃった？」

「一度だけな」

妙に切羽詰まった奴等に囲まれた事があった。

まあ、よくある事だ、と流していたが。

モテすぎるのは大変だなあ、と。

だが良く思い出すと、紗那に頼みたい云々とか言ってた気が。

「だって、お姫様をして欲しい！ とか言っんですもの」

「あー、お前、それ系キライだもんな」

「こんな所でもやりたくないもの」

紗那の言い回しに、味噌汁をすすりながら首を傾げた。

「じゃあ先に行くわね？」

「コーヒープレイク、付き合えなくてゴメン」

「気にするな。」

「行ってこい」

「ふふ。

行ってきます」

必ず「行ってきます」「行つてらっしゃい」の挨拶を交わしたがる紗那に、ひらりと手を振り送り出す。

カシヤンと玄関の扉が閉まる音を聞きながら、ヤカンに火をかけていると。

「あんた、行かなくて良いの？」

真後ろから声をかけられ、びくりと肩がはね上がった。

振り向くと、母さんが眉を寄せて見上げてきていた。

怖！　つか気配なさすぎだろ！

「サボり？」

「ちげーよ。

紗那は突然呼び出されて放り出した仕事しに、早めに行つたんだよ」

「仕事？」

「ああ、今文化祭の準備してるからな」

「あらう。」

ふふ。学生ね。青春ね！」

「……」

……おばさん臭いって言ったら、殺されるだろうなあ。

「つか、母さん？」

「なに？」

あら、美味しそうな味噌汁！」

コーヒー豆を挽きながら、味噌汁をよそおつとする母さんから器を奪う。

「一度寝てから食え。」

紗那が作った二日酔い用だ。

つか、母さん。

まだ寝ないのか？」

器を奪われ口を尖らせた母さんは、腕を組みふいつとソップを向いた。

「お酒ごときに、お母さんが吞まれるワケないでしょ。それに……」

湯を淹れ拡がったコーヒーの匂いに、うつとりしていたが、途切れた言葉に首を傾げ振り返る。

「それに？」

言葉を反復するが、母さんは困った顔をするだけだった。

「……？」

登校時間も迫ってきているので、さっさとコーヒーを立ったまま飲み干し、カップを洗い終わっても、じっと俺を眺めているだけだ。

「どうせ俺たちが引き上げても飲み続けてたんだろ？ 寝れば？」

蒼貴用の梨を乗せた皿を抱え、2階の部屋に戻ろうと背を向けた瞬間。

「ねえ、貴生君。

お母さんに言うこと、ない？」

珍しく真面目な声色での質問に、俺は振り返った。

声と同じく、至極真顔の母さんに俺は首を傾げた。

……、どうしたんだろ？

「何を？」

じつと見つめられたが、心当たりはない。

困惑していると、母さんはふっとため息をついた。

「いいわ。

行つてらっしゃい。

気をつけてね？」

「はいはい」

いつもの陽気な表情に戻った母さんに、もう一度首を傾げたが登校時間が迫っていることもあり、俺は自室に足を向けた。

## 古き誓い

「行つてきます」

小さな声とともに、玄關の扉が閉まる音を聞きながら桜花は額に手をやる。

「桜花ちゃん？」

貴流が顔を出したが、表情は手の奥に隠れて見えない。

「貴流さん……」

震える呼びかけに、貴流は妻の元に足を運ぶ。

「どうした？」

優しく肩を抱くと、桜花は夫に凭れかかる。

「貴生君の……」

息子の名前に、貴流は桜花が震える理由を察する。

「もう16歳を迎える、ね。」

……私たちが生涯をとにすること、そうして子どもを持つことを

決めた時、一緒に誓った。  
覚えているかい？」

背中をさすり、穏やかに話しながら桜花をリビングのソファに導いた貴流は、静かに尋ねる。

「私は、いつでも君とともにいる。  
一緒に罪を背負う。  
そう、誓っただろう？」

夫の優しい言葉に、桜花は一筋の涙を流す。

「誰もが反対した、私たちの婚姻。子どもを生むこと。  
桜花ちゃん、君は後悔しているかい？」

慌てて首を振る妻の頭を撫で、貴流は微笑む。

「私たちの子どもだ。  
立ち向かって行ってしまうだろう、どんな事にも」

眉を寄せたまま、悲しい表情を浮かべた桜花の顎をくいと引いて貴流は目を合わせた。

「まあ私たちのどちらに似たのか。  
超現実主義な子だけだね？」

私たちの子どもなのにねえ、と軽い口調で呟く貴流に、桜花も笑ってしまふ。

「今や世界にたった一人しかいない、魔術師の貴方の息子なのに」

「世界を守護する、3本柱の一人、ゲートキーパーの君の息子なのに」

「どうしてあんなに、現実主義なんだろうね？」

わざと声を揃えて、顔を見合わせてくすくす笑う。

特に桜花は、芋蔓式に思い出した過去に、笑いが止まらない。

「桜花ちゃん」

ふと真面目な声色に戻った夫を、桜花が見上げると、こつんと額をぶつけられた。

「貴生の封印が解けはじめているのは、私も気づいている。

だがね、もうこれ以上の封印を加えると、貴生の力は暴走してしまうだろう。

できるだけ、力を身体に馴染ませながら封じていたけれど、さすが私たちの息子だよ。

普通有能力者に施す数十倍の強さの封印なんだけどね」

小さくため息をつき、貴流は目を閉じた。

「16の年とともに。

封印は解除される。

桜花ちゃん。

覚悟を」

はつきりと告げられたリミットに、桜花も瞳を閉じる。

「はい」

返事とともに、桜花は強い決意の色を混ぜた瞳を開く。

「気高く生き抜ける運命を」

「私たちの息子に」

新たな命が宿った時の誓いを。  
二人はもう一度世界に誓った。

## 襲撃 1

「なーんか、母さん、変だったなー」

「きゅー？」

チャリを漕ぎながら呟くと、鞆の隙間から顔を覗かせた蒼貴が首を傾げた。

どうしたの？　と言われた気がした俺は、ちらりと蒼貴をみて視線を正面に戻す。

「昨日から、時々不安そうな顔で俺を見ててなー」。

……、別にバレてヤバいこと、そこまでやってない筈なんだけどもな？」

「……、きゅきゅ。きゅきゅきゅ」

呆れた響きな鳴き声に、俺は小さく肩を竦めた。

「喧嘩くらいじゃ、拳骨で終了だしな、母さんの場合」

「……、きゅうう」

あっそ、ふーん、と言われた気持ちになり、俺は唇を尖らせた。

「そついう母さんなん……？」

ふと、後ろからゆっくりとしたスピードの車がいるに気づく。

自転車のスピードに合わせるように、一定のスピードを保っている。  
それ即ち不審車だ。  
経験上、警戒するに越したことはない。

言葉を切り、真剣な表情になったのに気づいたのだろう。  
蒼貴も首を巡らしている。

それは唐突に始まった。

パシュパシュ。

空気の抜ける小さな音とともに、耳元に風圧を感じた。

「ちっ！」

舌打ちをし漕ぐスピードを上げつつ振り返ると、車の窓から腕が伸びどうみても銃の構えを取っている。

「くそ、銃刀法違反だろ、あからさまに！」

自転車をスゴいスピードで漕ぐ俺は、チャリを使う時は安全のため裏道を使って通学している。  
それが幸なのか不幸なのか。

取りあえず、他人を巻き込む心配だけはない。

パシュパシュ！

間抜けな音とともに、何かが通り過ぎている。

「くそ！」

小刻みにハンドルを揺らし進路を変えていたが、遠くで一台の自動車が横付けになり、細道を塞いでいるのが見えてきた。

「おい？ …… おいおいおい！」

車の前にはどうみても、一般公道を歩けなそうな黒尽くめにマスクまでつけ、銀色の棒を持って男たちが群がっていた。

「こら、おい！」

刀かよ、ありゃ？

警察は何やってんだよ、一般公道での怪しいヤツ、逮捕しなくてどうする！？」

どんどん近づく黒尽くめのマスク男たち。

後ろからは、道を塞いで進んでくる銃を打ってくる奴ら。

風を切りつつ、策を練る。

黒マスクたちの後ろで横付けになっている車は、簡単に動けないだろう。

……、緊急事態だ。  
やるしかない。

「蒼貴。

鞆が吹っ飛ばないこと、願っとけ」

「きゅ！」

俺にも任せとけ！ と返事をもらった気がする。

頼もしいかわからない言葉への愉悦とともに、ふつつつとたぎる心の高揚を覚え。

にやり、と。

俺は唇を歪ませた。

## 襲撃 2（前書き）

3人称です。

「あら？」

学園祭のため校内にいた紗那は、猛烈なスピードで学校に走り込んできた貴生の気配に首を傾げた。

いつもより遅いが、まだ遅刻するような時間ではない。

疑問のまま気配を追うと、貴生は教室には向かわず屋上に突進して行ったようだ。

「……？」

普段のおちゃらけた雰囲気は一切ない貴生が気になり、紗那は屋上に向かうことにした。

屋上に向かうすがら、常日頃気配を消して生活をしているため、居場所がわからない暁にメールを入れる。

携帯の着信に一発では気付かない暁には、メールが良いのだ。とりあえず、日に何度か確認するように頼み込んである。

歩き出した紗那は、一旦人気のない場所に移動してから、改めて屋上に向かう。

姿を見咎められれば、引き止められるからだ。

屋上に近づくにつれ段々と貴生の気配が読みやすくなってきたが…  
…、興奮している？

ケンカをしている時でも、これほど分かりやすい気配にはならない貴生だ。

何があったのか……、と紗那はため息をつきつつ、屋上の扉に手をかけた。

——キンコーンカーンコーン

開いた扉から涼しい風が舞い込むと同時に、HR開始のチャイムが流れてきた。

「……………あら」

開けた途端、目の前に広がった光景に、一瞬絶句した紗那は小さな驚嘆の声を上げるしかなかった。

貴生は、紗那が来たことも、その他諸々の現象にも気付いてはいるのだろう。

屋上の給水タンクにもたれ、愛用のノートパソコンを睨み付けながら指を動かしていた。

扉を閉め、扉に凭れ掛かった紗那は、さてどう声をかけようか迷う。

歩み寄ってこない紗那に、貴生の肩に乗っていた蒼貴が首を傾げてから翼を広げて見せた。

紗那は貴生が顔を上げる気配がないことを確認し、頷いて蒼貴を手招きする。

ちらりつと貴生の顔を見た竜は、器用に肩をすくめる仕草の後、翼を使い紗那の足元に降り立った。

「ききゅー。」

きゅきゅー？」

——良き新しき日に祝福を。  
いかがした、異界の姫よ？

小さな頭をもたげる蒼貴に、紗那も膝をつく。

「御君にも新しき日に祝福を。  
それにしても、何があったのですか、これは？」

若干呆れを含ませた紗那の言葉に、翼を畳んだ蒼貴も長い首を傾げさせた。

「今までになく、貴生から純粹な魔力が垂れ流されてますよ？」

「ききゅー」

——うむ……。

困ったように尻尾を揺らす幼竜から、真剣な眼差しでパソコンを弄る貴生を眺めやる。

「……あれだけ集中してパソコンを操作しているのを見るのは初めてです。」

魔力も使って操作していますよね、アレ。  
無意識でしょうけど」

「きゆう。」

きやう、きゆきゆきゆ、きゆうききゆうきゆ……」

——うむ。

どうやら私の主になることで、封印されていた魔力が押さえきれないほどに増大して、だな。

ちよっとうなだれ気味の蒼貴の言葉に、引っかかる所があったが先を促す。

蒼貴は貴生をちらりつと見やり、気を向けられていないことを確認してから、鳴くのは止めた。

——そこでだな。

先ほど殺気を持つ者たちと遭遇したのだ。

「はあ？」

蒼貴の言葉に思わず声を上げてしまった紗那だった。

### 襲撃 3 (前書き)

投票して下さった方、ありがとうございます！

コメント下さっている方、全部読んでいます。  
本当にありがとうございます！！

### 襲撃 3

思わず声をあげてしまった紗那は、慌てて口を押さえた。

「失礼いたしました。」

まあ、喧嘩でよく襲われているのは知っていますが……」

今までとは違う様子の貴生が目の前にいるだけに、いつものことだろう、とは言えない紗那。

ため息をつきつつ、携帯を確認し、暁からの連絡がないことを知る。仕方がないか、と一瞬空を仰いだ紗那は、真剣な表情になり屋上に座り直した。

「蒼貴様。」

私を知る限り、貴生から魔力が漏れ出ることはありませんでした。むしろあの両親から生まれながら、一切魔力を持たないハグレ。そんな立場に彼はいます。

ですが、それらはただのフェイクだった。

そういう認識で間違いはないですか？」

紗那の話に首を傾げた蒼貴は、主である魔力で渦を作っている貴生を振り返った。

「――ふむ？」

主は元々壮絶と言ってもよいほどの魔力を持っていたぞ？  
だからこそ、まだ卵から孵っていないかった私を引き寄せたのだから。

とはいえ、私が孵化し、自我を持ちつつも主を「主」である、と定めてから数値はさらに激増してしまったようだ。

蒼貴の言葉に、紗那は唇に手を当てて考え込む。

――ああ、そういえば。

深い思考の海に入っていた紗那だが、思いついたような蒼貴の言葉に意識を戻す。

――かなり嚴重に能力の封印がかかっているぞ、主には。

「……え？」

――魔力を含め、多くの能力が顕現せぬよう、注意深くかけられておるな。まあ、力の大きさに、封じが緩み始めておったようだが。

竜の言葉に、封印を施したのが誰か、すぐに想定がついた。

――どうやら、「じゅうとうほう」という法を犯す者どもとの争いに、主の闘争心に火がついてな。今に至ってしまったのだ。

そうですか、と一瞬流しそうになった紗那だが。

「……、じゅうとうほう？　って、「銃刀法」のことですか?!」

慌てて問いだす。

――うむ？　魔術でもなく、殺傷能力のある道具で狙われた時に、主が叫んでおったぞ？

「……、はあ」

思わず額に手をやった紗那。

その時、「ふふふ、ゲットだぜ……」という黒い声を聞き、振り返る。

視線の先では、黒い笑みを浮かべつつ画面を凝視している幼馴染がいた。

「……、暁が来るまで、放っておきたいわね、ホント」

空を仰ぎつつ呟く少女に、幼竜が、膝に手をポンと置いてくれた。

## 襲撃 4（前書き）

暫く振り過ぎる投稿です。

それも話が全然進んでません（T|T）

文才が貧し過ぎる自分に絶望デス。

## 襲撃 4

昼休みに入り、紗那と暁は、まったりと森の中でランチタイムに入っていた。

「あら？」

気が済んだのかしら？」

身体を魔素に慣らすための自家製ハーブティーを飲みながら、紗那は木々の向こうにある屋上で動き始めた気配を眺めやった。

木に凭れ片膝に腕を乗せて空を見上げていた暁も、屋上の方に視線を向ける。

「……楽しそうな気配だな。  
何をやらかしたのやら……」

ため息とともに遠い目をした暁。

今朝暁は、HRが始まっても姿を現さないキオを不審に思い、携帯を確認し紗那からのメールを気付き、屋上に上がった。

そこで暇そうに扉近くで戯れていた紗那と蒼貴、奥で黒い笑みを浮かべているキオを見つけたのだ。

軽く説明を受けた暁だが、蒼貴と紗那共にイマイチ状況がわからないことにはわりはなく、一時間目をサボりつつキオを待ったが、時間が過ぎることに黒い笑みが深くなっていくのを見て、キオが満足

するまで放っておくことにしたのだ。

「昨夜の件は、放課後も探す？」

昨夜の不審者の事は、屋上で既に紗那からこの高校内部に入り込んでいた事を聞いていた。

しかし侵入したのは良いが、フラフラ敷地内を飛び回って直ぐに退去した事も。

だが何かを仕掛けた可能性も考え、敷地内を力を使わず地道に足で休み時間ごとに探しているのだ。

「念のため、あの不審者が動き回った箇所は確認したい」

「まあ、妥当でしょうね」

楽しそうな雰囲気醸し出している貴生を、呆れた目付きで眺めながら二人は密談を終わらせた。

「昼食い終わったのか？」

足取りも軽く二人の元に歩み寄った貴生は、地べたに座り込む。

「ぎゅ」

地面に置かれた鞆から、蒼貴の潰された声が響く。

「ああ、悪い。やっぱりパソコンは熱いよな」

蒼貴を出しながらニやつく貴生に、紗那と暁は顔を見合わず。

確かに蒼貴は今、

——主よ、熱いのだが！  
と言っていた。

暁は同族の言葉であり、紗那は勉強したので竜の言葉？はわかる。  
今のやり取りは、明らかに蒼貴の言葉を理解していた。  
自称一般人なはずの貴生が。

「ねえ、貴生？」

「あ？」

「蒼貴様の言葉、わかっているの？」

「言葉？」

わかる筈ないだろ？

竜が日本語話すワケがないない」

あっけらかんと手を左右に振ってまでの否定に、紗那はため息をついた。

やり取りを無言で眺めていた暁は、会話が途切れたので、脇に置いてあったビニール袋を貴生に投げやる。

「何だ？」

危なげなく受け取りつつ、貴生は中身を覗く。

「やる」

再び木に凭れかかった暁に、貴生は笑顔を向けた。

「サンキュー！」

昼、どうするかとちょうど考えてた」

数種類のサンドイッチとパンが入っている袋を探りながら、貴生はふと隣で丸くなっている蒼貴を見下ろす。

「そついえば蒼貴の果物、持ってきていないな……」

「きゅう。きゅきゅーきゅ」

——構わぬ。あれば嬉しいがな。

「そつか。」

明日は欠片でも持ってくるか……」

取り出したサンドイッチの袋をパリパリ開けながら頷く貴生は、紗那との会話が途中になっていることを思い出した。

「言葉はわからない。けどな、何を言いたがっているかわかる、と思ってる。」

あれだよ、ペットの気持ちがわかる、みたいなアレ」

呆れたように目を細めた紗那に気付かず、

「因みにさっきは、「仕方ないなあ、でもいいよ」ってな事、鳴

いてたよな？」

などと、片手で蒼貴を愛でもう片方の手でサンドイッチを摘まむ上機嫌な貴生に、紗那は飲んでいたカップを膝元に戻しつつ、話題を変えることにした。

「それで？」

「あ？」

「朝、何があつたの？」

コトン、と首を傾げた紗那が聞くと、次のパンをゴソゴソ探っていた貴生は顔を上げた。

選んだパンの口を開け、不快感一杯な表情をしてから一転してニヤリと笑う。

虚空に視線をやりつつ変わる貴生の黒いオーラに、顔を向けていた暁が疲れたため息をつく。

「きゅう、うう」

——楽しそうだな、主よ。

ゆらりと尻尾と揺らした蒼貴は、身体を臥せた。

「ああ、久しぶりだったから、楽しかったなあ」

黒い笑みを浮かべたまま、貴生は今朝の出来事を二人に話すことにした。

## 襲撃 5

蒼貴の鳴き声を契機に、俺はチャリの爆走スピードを早めながらタイミングを見計らう。

立ちはだかる黒マスクどもは、みるみる近づいてくる俺が止まる気配がないのに動揺し、一文字に並んでいた隊列をU字型に変えた。

頬を通り過ぎる風の冷たさが、刹那のタイミングを睨む俺の頭をクリアにしてくれる。

後ろを一瞬振り返ると、同士打ちを恐れたのか銃を持っていた腕は引っ込んでいた。

十字路になっている狭い道に寄せ、みっちりと塞いでいる車と、U字から両脇に並ぶ陣形になった黒マスクたち。

緊張に一瞬唇を舐め、黒マスクの一番端に差し掛かった瞬間、後ろタイヤのみ思いつきリブレーキをかけた。

キキキ——！

甲高い金属音と慣性の衝撃が身体を襲う。

後ろタイヤが勢いに振り回されそうになった瞬間、重心を一気に後

る側に流し、前タイヤを浮かす。

「っし！」

次の瞬間には自転車から飛び降り、「うらぁ」と飛び上がった自転車  
車を勢いのまま、持っていたサドルごと車の向こうに放り投げた。

俺も勢いのまま数歩走ってから、走り幅跳びの要領で力の限り地面  
を踏み込む。

「よっ！」

ガツと思いつきり邪魔だった車を踏みつけ、再度翔ぶ。

この間、正味5秒程度だろう。

チラリと横目で確認した黒マスクたちは、腰を落とし構えた姿勢の  
まま俺の姿を追っているだけだ。

視線が合った（と思った）黒マスクの一人に、ふふんとせせら笑っ  
てやる。

視線を前に戻し、落ちてくる自転車の右ハンドルを引っ付き、同  
時に地面に降り立つ。

ガシャガチャーン！

「ぎゅぎゅ！」

ぎゅー」

蒼貴の潰れた悲鳴が聞こえた気がするが、後回しだ。

元々凄いスピードを出して通っていたため、鞆の持ち手を左ハンドルの引っかけていた。

段差で鞆がカゴから飛び出さないようにだ。

今回の乱暴にもすっかり自転車に引っかかったままだった。良かった良かった。

「行くぞ」

そのままバランスを取ってチャリに乗り、立ち漕ぎでスピードを出し始めた頃。

「何をしている?!  
追いかける!」

「お前邪魔だ!」

「お前こそどけ!」

と言う怒号が聞こえてきた。

「バーカ。  
遅いよ」

呟いた俺は、進路を大通りに向ける。

大概ああいっ輩は、人目につく所では襲ってこない。

悲しいことに、それが分かる程度には経験がある。

それに。

「車とか。

足つく証拠品、サンキュー」

「きゅきゅー？」

——主、どうしたのだ？

若干引き気味な蒼貴に、満天の笑みを浮かべてみせた。

「ここからが、俺の本領だぜ？」

嬉々とした声色で答えた俺は、学校に向けて、ペダルを踏み込んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7197h/>

---

リアルファンタジー

2011年3月24日05時05分発行